
蜘蛛の復讐

凧竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蜘蛛の復讐

【Nコード】

N7854E

【作者名】

風竜

【あらすじ】

僕はただのストレス解消の為に神社で偶然見つけた大蜘蛛を殺してしまった。しかしその出来事以来、決して順調とは言えなかった僕の人生の歯車が狂い始める。何故だ、なんで僕だけがこんな不幸な目に、、完結しました10/9次回作の月光下の舞踏会もよろしく願います

一話（前書き）

「非人道」をほっぽりだしてある日会社にて閃いたアイデアを基にこんなん書いてしまいました。

非常に暗い内容です。

今の作者における精神状態を反映してるかも、、

一話

僕はくたびれた体を労るようにしてバイトから自宅への帰路に着いていた

片手には銀色に光る果物ナイフを握り締めてだ

どうしてこんなモノを持っているか等と質問されたなら僕は

“人を刺すつもりだった”

というんでもない理由が動機であり正解であると答えるしかない

昨日バイト先で僕より年下の高卒連中が昼休み中に休憩室前で

「あいつってさ、アキバに居そうなタイプじゃね」

「あ！それ言えるかも」

「デブだし、臭いし、根暗だからねー」

彼らに気を利かせてお茶を差し入れしようとし、陰口を密かに聞いてしまった僕に生じたのは金髪一名と雌豚二名に対する即発的な殺意だった

僕はその日のバイトを中退し、明日ヤツらに思い知らせるがために帰り道に通るスーパーで果物ナイフを購入した
そして明日に備え早く眠りについた

だがその計画は実行出来なかった

いざあいつらを刺してやろうと話し掛けてから注意を逸らしその隙に刺してやろうと思っていたのだけど

金髪の山城に呼びかけた時、奴の鬱陶しそうな目で睨まれた際に僕に満ちていた怒り気力が恐怖で萎えてしまったのだ

“ 仕返しが怖かった ”

“ もし失敗したら ”

そういったネガティブかつ後ろ向きな感情が蘇ってしまったからだ

今、帰路に着いている僕の中では、何もしなくて良かったと安堵する自分とそれを弱腰と蔑み、己の負け犬根性に絶望する自分のせめぎ合いで疲労していた

今は一時の感情に任せた馬鹿な行動は起こさなくて正解だったと思う
しかし行き場の無いドス黒い怒りと自分自身への苛立ちは未だ健在であり

明日からもこれを抱えて過ごすのかと思うと締め付けられたかのように胸が苦しくなってくる

そんな時に帰りの道にある山に隣接した神社近くの雑木林で “ アレ ” を見つけたのはある意味運命だったかもしれない

それは蜘蛛だった

しかも普通の蜘蛛ではない

大きさにして30?程のタランチュラよりでかい大蜘蛛だった

姿は室内でよく見る胴体が小さく脚が長いイエグモと違って対称的に脚が細くて腹部が異様に大きいオニグモをそのまんま拡大した感

じだった

それに神社に住んでいる蜘蛛らしく品格を有しているのか、目の前の僕なんか気にせず木を幹をのっしとゆっくり時間を掛けて一本一本が僕の小指ほどの太さを誇る八本脚を蠢かせて登っていた

そんな時に僕があゝの行動を起こしたのは必然だったかもしれない

僕は非常に苛立っていた

自分の職場と将来に不安を感じていた

そして手には果物ナイフが握られていた

気が付いたら目の前には僕の果物ナイフで滅多刺しにされ、地面で弱々しく脚を痙攣させる大蜘蛛の姿があった

「・・・はは」

僕はそれを観察しながら蜘蛛の腹部にゆっくりとナイフを沈み込ませた

果物ナイフの短い刃が完全に蜘蛛の体に埋没すると蜘蛛は一回だけビクツと痙攣しその際に腹から飛び出した体液を僕の右手に浴びせた後、二度と動かなくなった

「あ・・・はははははッ！」

快感だった

他人とともにコミュニケーションが取れない苛立ちを他のモノに痛みを与える蹂躪していくことで解消していく行為が

こんな素晴らしいものだとは思わなかったからだ

「なんだ、みんな動物虐待がいけないとか虐めは悪だとか訴えておきながらそういった犯罪が全然減らないのは、他者を虐げ、自分より下に貶める愉しみをみんなが知っているから止められないだけじゃないのか」

喉から自分の声とは思えない程大きい笑い声が響く

無論、人前でこんなに笑った事はない

「僕の陰口を言った連中もそうだ。自分じゃあ就職も何も出来ない、何処ぞの会社で頭を下げることはプライドが許さない。そこで生じるストレスは何処へ行く？ いや、何処にも行かない、自然に発散なんてされない。だから他者を見下し蔑む事で自らを優位に立たせ、ストレスから生まれる不安を騙しているだけなんだ！」

愚痴る相手がいない為に、溜め込んできた憎しみが喉から吐き出される

「この社会はみんなそうだ。綺麗事をほざき偽りの仮面で自分を騙し、その実は同類であるはずの他者すら醜いと嘲っている」

そして自分のしたことを歪んだ大義名分で正当化する

「だから僕は間違っていない。この蜘蛛を潰したのは巡り巡って循環してきた社会の悪だッ！僕は間違っていない・・・」

自分で言って虚しくなった

生まれて初めて自分が支配して虐げた相手が只でかいだけの蜘蛛だとは

頭が冷えるに従って、高揚した心も冷却される

冷却されて思考が冷静になる過程で戻った正常な判断力が、状況が蜘蛛一匹だけ殺しただけでは何も変わらないと悟る

「帰るか」

大蜘蛛の死骸を神社前に放置したまま、きびすを返し自宅のマンションへ向かう

「・・・？」

先程から右手がむず痒いが夏場なので汗のせいだと決め付ける

しかし掻いてみても発疹や蚊に刺された跡はわからなかった

そして、痒みは自宅に帰ってもまるで収まる気配は無かった

二話（前書き）

アシダカグモ（作中ではアシタカグモ）：元々日本に生息していない亜熱帯に住む蜘蛛で、船等に紛れて本土に運ばれてきたといわれる。その気持ち悪い外観と大きい個体では13センチをもある巨体、そしてカサカサと素早く天井や壁を這い回る姿からゴキブリ等を駆除する益虫であるとは知らずに殺虫剤等で毒蜘蛛として殺されることもしばしば見られる。しかし基本的に臆病な蜘蛛であり人が近づいただけで逃げ回るため、素手で体を掴む等危害を加えなければ噛み付かれる事もない。よく知られる「蜘蛛の子を散らす」という言葉はこのアシダカグモの習性から来ている。

ちなみに私の地元では夏場に頻繁に姿を見せ、コガネグモと共に子供時代のトラウマと化している。

作中に出したのは目にした際のあまりに強烈なインパクトから。

二話

あれから僕は自宅に戻った

無論右手の痒みは全く治ってない

それどころか右手から更に広範囲へと広がっている気がする

そして、これは発疹が皮膚に発生してそこで生じる炎症とも違った気がした

いうならば何かが右腕の中を這い回って攪りたくて痒いような、そんな痒み

その何か、例えば――蜘蛛とか

「馬鹿馬鹿しい」

先程殺した蜘蛛の呪い？

いや、そんなことがあるわけがない

ただストレスが溜まっているから多少の疲れが体に出たのだろう
たちの悪い藪蚊に刺されたに違いない

今日は早く寝よう

寝室へ行き、電灯を消す

無論痒みは収まらない

すると壁の向こうから大音量のポップスが流れてきた

そこで溜め息をつく、恐らく隣人の藤谷だろう

最近の音楽には全く興味が無いがニュースなどでもよく流される曲

だった

普通マンションで隣人が煩いときは壁を叩くのだろう
しかし僕にはそれが出来ない

以前あいつが引っ越して来た時、今の様に大音量で音楽を垂れ流している藤谷が、僕の部屋へ乗り込んで文句を言ってきたからだ

それでも抗議すると殴られた
こんな言葉を言い放って

『臭いくせに五月蠅えんだよ。オタク風情が!』

僕は暴力を振るわれるのが怖かったので渋々と引き下がってしまった
以来あいつは好き勝手にお気に入りポップスを大音量で流す

僕の部屋から見て藤谷から反対側の隣人は友人らしく、当然文句すら言わない。それどころか一緒に下手な声でデュエットまでする始末だ

他の住民も文句を言って来ないのは僕同様に脅されたからだろうか？

大人し過ぎる管理人はトラブルを嫌って何も言わないらしく事なかれ主義で藤谷を無視している

暴力を振るわれるのが怖いのだろう

結局の所、住人の苦情を聞くより我が身が大切な様だ

そして、そいつの風体はバイト先の気に食わない山城に似ている気がした

何処に行っても必ず気に食わない奴は居るものだ

例えば、学校のいけ好かないクラスメート

例えば偽善しか吐けない教師

例えば兄弟と比べて能力的、外見的に劣っている方の世話をしない親

気が付くと時計は午後10時を指していた

早く寝ないと明日のバイトに差し支えてしまう

そこで眼を閉じるが痒みが気になってなかなか寝付けなかった

かゆい

掻かなければいずれ収まると思っていたソレは時間が経つにつれ次第に右腕全体に広がっていた

我慢出来ない

左手で右腕の疼く箇所を掻き篸る

そのたびに皮膚が赤く腫れ、それでも掻くと皮膚の薄皮が破け、血が滲み出す

だが、それは痒みを痛みに変えるだけの行為であり、全く無駄であるとしたと言えなかった

痒みは収まる気配を見せず、それどころか右手を蝕む炎症は更に広範囲に拡大していく兆しさえ見せていた

結局昨日は一睡も出来なかった

そして痒みは少しも治まらなかった

だからといってバイトを休むわけには行かない

眠気を無理やり押さえ込み、服を着て玄関に立つ

痒みは一晩中あったので意識に耐性が付いたのか、右腕の肘辺りまでに広がっているだけで痒みそのものは若干収まったのか、元々それ程酷くは無かったのかは知らないがバイトに支障が無い程には我慢できるようになっていた

そして

靴を履こうとしたときそれを見た

蜘蛛だった

しかし昨日のやつとは違い家でもよく見る脚部が長いイエグモ（本名アシタカグモ）だ

しかし大きい

昨日の大蜘蛛程ではないにせよ脚まで考慮した大きさは15?くらいだった

そいつが靴のつま先に張り付いている

履くのに邪魔だったので手で追い払おうとしたその時だった

なんと、僕に飛びかかって来たのだ

イエグモはそのまま僕の左手に噛みついた

「ひっ！」

びっくりした僕はその手を振り蜘蛛を叩き落とした

「何だ、今の蜘蛛は・・・」

イエグモが落ちた辺りを見てみるが、何もいなかった

有り得ない

普通イエグモはこちらが危害を加えようとして近づけるとすぐさま逃げて箆笥の裏などに隠れるものではなかったのか？

自分より遥かに巨大な人間を襲うなんてとても信じられない話だ

噛まれた左手を見るとそのまま腕時計まで目に入る

「ヤバい！遅刻だ」

バイト先はいつも通りだった

山城は仕事そっちのけで同期の女子二人と喋っており、その分の仕事は、勿論僕に回って来た

これもいつもと同じ

しかし今日の僕は一睡も出来なかった上、昨夜から謎の痒みに苛まれている

コンディションは実に最悪だった

実際、眠気と痒みで仕事が進まない
それだと言うのに

「おい。これも並べとけよ」

いけ好かない山城は僕にビデオテープの入ったダンボールを押し付け、偉そうに命令する

「・・・わかった」

「早くやれよ」

あいつの仕事を手伝ってやってるのに、それがさも当然というばかりに山城はレジ後ろに入っていく

そして休憩室に入るその間際

「くせえ」

ここまで聞こえるか聞こえないかの微妙な声量で吐き捨てる
これは最近いつも言われる

山城が入ってきた最初の頃は一昨日知ったばかりだが陰口だけだった筈だ

それを見てレジに立っていた雌豚二人が僕の方を向いてクスクス笑う
店長に見せる媚びた笑いとは明らかに別種の完全に相手を下に見て蔑んだ嘲笑

その内の一人。ツインテールの茶髪がもう一人のポニーテールに耳打ちして何かを相談した後、山城と同じにやにや笑いを顔に貼り付けてこちらにやって来る
個人営業の田舎のビデオ屋で働くにしてはやけにケバいい臭いが鼻につく

「じゃあ、これもやつといてねー」

とあいつと同じように仕事を押し付けてくる

その後去り際に

「うわぁー。臭い」

と、山城と異なりあからさまに僕に聞こえるように呟く

（僕からすればお前らの方が臭いんだよ。香水付けすぎてるんじゃない、こんな田舎で男漁りでもするつもりか？）

とは思ったものの言い返せない

女子による報復が怖かったからだ

小学校五年生の頃クラスの女子一同に無視されたただけでは無く、

ランドセル以下教科書、体育服、上履きすらドブ川に棄てられた虐めを思い出す

僕はストレスと右腕を苛む痒みプラス眠気を押さえながら仕事をこなした

その最中にミスを連発しその度店長に怒鳴られた

「何をやってるんだ！」

「仕事に身が入って無いんじゃないの？」

「同じミスを何回も繰り返すなよ！」

「後輩の山城達は頑張っているのに、お前ときたら役立たずだな」

この店長は山城一同が入ってくる以前はたまに喋ったり、珈琲を差し入れて貰ったりしたものだ

それが今となつては山城達に僕の悪口を吹き込まれてこの有り様である

大抵の人間は必ず強者の下につく

山城達は上手く店長に取り入って楽をしている

だから僕があいつらに仕事を押し付けられても知らんぷりを通して
いる

人間とは薄情なものだ

虐めにあっている僕を慰めてくれた教師もこんな感じだった

最初のうちは虐めのリーダー達に話を付けようと色々取り計らってくれたものの、それだけでは虐めが収まらないと知ると一転して僕に無関心になった

だから朝の会や発表会なんかで僕が意見を言ってそれが無視された

り、馬鹿にされても知らんぷりで通すようになった

どうやら自分の処理能力を超える面倒事には顔を突っ込みたくなかったらしい

では、僕みたいに強者の元に付くことすら出来ない最下層の人間はどうすれば良いのか？

一生虐げられたままなのだろうか？

そんな事を考えている内に

時計はようやく5時を回り、バイトが終わる

僕はやっと苦痛の時間から解放された

二話（後書き）

筆力向上の為に是非とも感想、評価をお願い致しますm（
m（

三話（前書き）

一気に投稿します。一応一週間書き溜めていた奴ですが、誤字脱字が多いかも、、、

三話

自宅に帰った後、痒いのを我慢しすぐさまシャワーを浴びる

約1日ぶりの行水は非常に気持ち良く体の汚れと一緒に疲労や痒みをも洗い流しているようだ

依然、謎の痒みは消えなかったが、悪臭は洗い流す事が出来た僕は満足だった

浴場から出た後その場に倒れ伏し眠ってしまいそうだったけど、此処で寝ると夏場で気温が上昇しているとは言え間違いなく風邪をこじらせるだろうから必死に眠気をかみ殺し寝室へ向かう

下着と申し訳程度にパジャマを着てすぐさま僕はベッドに倒れこんだ

上布団やタオルすらかけずに僕は眠りについた

久しぶりに夢を見た

夢の中

東京の街

たくさんの人混み

僕は一人で歩いている

僕以外全てはモノクロの世界

場面が切り替わる

辺り一面緑色————樹海らしい

テレビでよく特集が組まれる自殺者が多いと聞くあそこだろうか？

そこを東京と同じ様に一人で進む

奥へ、奥へ

更に深い、日の光さえ届かない深淵へ——

ふと、大木の前で立ち止まる

――屋久杉だろうか？

その木の幹に何かがいる

蜘蛛だ。それも昨日殺したやつと同じ位の大蜘蛛

気付けば右腕には果物ナイフ――大蜘蛛を殺した時に使用したのと同じ真つ赤なグリップの折りたたみ式ナイフが僕の右手に握られていた

振り上げた――何処に？

無論。大蜘蛛に向かって

――ざくり。胴体部のド真ん中に見事命中

大蜘蛛がずりりと音を立て、巨大の異形が大木から落下する

何故かそこでふと反対側の大木が目に入る

大蜘蛛。――先程と寸分違わぬ、同じ光景

再度ナイフを振り上げる

胴体に風穴を開けられ樹海の地面に落ちる大蜘蛛。――これも全く変わらない

また、別の大木をみる

大蜘蛛――煌めくナイフ――落ちる巨体

そして、別の木を見る

結果は同じ――落ちる蜘蛛

それをエンドレスで繰り返す

何十の蜘蛛が地面に落ちただろうか？

築けば樹海の深緑色の絨毯が大蜘蛛の死骸で覆われている

僕はそれを無表情に眺めていた

それに異変が起きたのはすぐだった

何十何百と積み重ねられた蜘蛛の骸の絨毯の隙間から、朝見た薄茶色いモノが這い出てきたのだ

今朝僕に噛みついたイエグモ

大きさも昨日のあれと同じ

だが今度は一匹だけでは無かった

黒い大蜘蛛の死骸が茶色い絨毯に覆い尽くされたかの如く何百、何千という数では到底及ばないイエグモの大群に蹂躪されたからだ

彼らは食べていた――何？

当然、イエグモ達が蹂躪している大蜘蛛の死骸をだ

細長い八本脚を支柱にし、腹だけを上下に蠢かせてイエグモ達は“食事”をしていた

そのおぞましい茶色の海の中で、

僕は逃げようとすらせずにただただ震えていた

やがて、イエグモ達の動きが止まった

食事が済んだのだろう

そして暗い暗い森の中で輝く何万という眼が僕の方角に向く

その内の一匹が僕に飛びかかった

「ひっ……」

反射的にそいつを振り払う

しかし服に付着した巨大なイエグモはその一匹だけではなかった

見ると、服に――ズボンに袖に襟に所々取り付いていた蜘蛛達

「来るな……」

衣類の上だけではなくシャツの中にも入っている蜘蛛

痒い

カラダが痒い

全身が痒い

細かい毛の生えた小さい脚に体中を掻き回され痒い

同時に顔まで這い上がって来たイエグモが僕の口から侵入してくる

構わず蜘蛛だらけの腕で顔を払おうとした次の瞬間

その手にしがみついていた蜘蛛達が茶色一面の滝となって僕の頭に降り注ぐ

「――――！！」

僕の声にならない叫びが大声として喉から変換されていた

夢から覚める

熱病に浮かされたかのように体中から汗が吹き出る
全身が生暖かく水気を発しており気持ちが悪かった

と、同時に口の中に違和感を感じた

睡眠した後に口が乾く現象だと思ったのだが、舌に触れる感触はどうみても歯ではない異物だった

まさか

構わずそれを床に吐き出す
唾に混じって排出されたそれは

「嘘だろ？」

それは虫の脚だった

僕は虫なんかを料理して食べる習慣はない
ましてや昨日は何も食べていない

虫を使った料理と言えば知っている限りではイナゴや蜂が代表的だ
ではこの脚は何なのか？

ちょうど心当たりはあった、しかもさっき見た夢の中で

そしてそうと気付きたくなかった

その事実を認めてしまったら――

「っぴー――」

吐いた

吐く

吐く

吐く

吐き続ける

胃の中の全てを吐き出すまで

あれは只の悪い夢だったのではないのか？

脳裏を埋め尽くす無数の疑問

混乱し現実を半端拒否しかける

だが一番納得出来ない点

それは、

「なんで」

深い疲労と共に言葉を吐き出す

「僕だけが酷い目に遭うんだ、、」

それは不条理

「昔からそうだった。クラスメートは僕を臭いと嫌い、デブと蔑み、

人間のように扱われなかった」

僕が世界に対して溜め込んだ不満

「僕と同じデブもいた。けどあいつらはちやほやされて僕ばかりがいつも無視される」

僕の他者への憎しみ

「クラスメートばかりじゃない。先生も、近所のババア共も」

それが先程の悪夢による不安で解放される

「実の親だつて、そうだった！」

憎しみの重油に点火する

「一体僕の何処が悪いんだ！

人より少しばかり太ってるからか？

成績が悪かったからか？

兄弟より出来が悪かったからか？

それとも20歳まで二トだったからか？」

感情が止まらない

「少しくらい他人より劣るからってなんでこう不平等なんだ？

僕ばかりがこんなに不幸にあつてよい筈が無いだろうが

不幸になるべき屑は他にもいるッ！」

そこでここ数日の出来事―――神社で見つけた大蜘蛛を惨殺したこと、その後謎の痒みを覚え今も治らない事、夜に隣がうるさく

て眠れなかった事、寝不足にも関わらずバイト先で仕事を押し付けられた事、先程の悪夢

「それなのになんで僕ばかりこんな事になるんだ！だいたい蜘蛛を殺したことだって他の連中に行くはずの不幸が僕に回ってきたからストレスのはけ口の為には仕方の無いことだろう。バカな蜘蛛が祟るべきはバイトの山城だろ！」

頭の中で憎き山城とお付きの雌豚である上田、松木の顔が嘲笑を僕に向けていた。僕は架空の奴らに向かって憎しみを込めた視線を焼き付ける

その時

「ギャーギャーうるせえんだよデブ！」

玄関のドアが乱暴に叩かれている

隣の部屋のあいっだ

僕はストレスと痒みでくらくらする思考を深呼吸で落ち着かせようとする

だがドアを叩いた訪問者は忍耐が切れているらしく再びドアが激しく叩かれる

「おい！早く開けるよ！開けて出てこい！」

叫び返したい衝動を押さえながらも、結局は後の仕返しを恐れた僕は、負け犬の様に暗く沈んだ眼差しで虚ろにドアを見つめて小さな声で愚痴る

「五月蠅いのはお前だろ」

そう呟く事しか出来ない僕は僅かに躊躇した後、カチャリと音を立て憂鬱な気持ちで鍵を外した

三話（後書き）

是非とも感想、評価お願いしますm（
—
—
）m

四話（前書き）

今作から本格的にドロドロしていきます（汗

四話

ドアの外には案の定藤谷が顔を真つ赤にして立っていた

僕に向ける眼差しは怒りと侮蔑を湛え、玄關側にいる僕に対して射殺さんばかりの視線を突き刺していた

「お前さ、いきなりぎゃあぎゃあ叫びやがって、こっちはかなり迷惑してんだよ」

お前の言う迷惑は僕も受けているんだよという本音はおくびにも出さず

すっかりその剣幕に怖じ気づいてしまった僕の口から飛び出したのは謝罪の言葉だった

「そ、それはすみませんでした」

しかし藤谷はそれを聞いてますます機嫌を悪くしたのか

「はア？聞こえないんだよデブ。こっちは手前のせいでせつかく新曲を試し聴きしていたのに気が削がれちまっんだよ。それにしては誤り方に誠意が足りないんじゃないのか？」

どうやら僕に更なる謝罪を要求するらしい

蜘蛛の夢といいバイトの事といい、マンションの隣人であるこいつの事といい、なんで関わりたくもないトラブルに僕ばかり巻き込まれるのか

怒り狂った顔で藤谷は言った

「土下座くらいはしてもらわないとなあ」

実際は気が進まないうえに屈辱的だったがトラブルを避けられるのなら仕方がない

それに今は気分が悪い、居心地の悪い夢を見た後だがさっさと休みたい

だから僕は地面に膝をつき正座の体勢をとり両手を前に突き出し頭を下げた

「すみませんでした」

こういう奴に頭を下げるのは正直いやだったのだが、しょうがないこれだけやったのだから藤谷もきつと満足だろう
左腕に添えている右腕は相変わらず痒い。だから早く帰ってくれ

しかし

「・・・・く」

藤谷から発した言葉は謝罪を受け入れる台詞ではなく

「くははははははははははっ！」

先ほどの怒りから一転し、僕の醜態を馬鹿にする嘲笑だった

「え。お前馬鹿じゃね？今時本気で土下座なんかする奴がいるかい。これは傑作だ！ケータイのカメラで撮っとけば山城に画像送ってやったのによ」

こいつ、今なんて言った？

「山城の奴また喜ぶぜ。これでどんくさいデブをネタにする材料が手に入るってさ」

決して聞き間違いではない

こいつ——藤谷は間違いなく憎き山城の名前を出した
そうになると、もしかしてこいつは、

「あ、シクった。こいつの前で山城の名前出しちまった」

笑いの余韻を残しながら藤谷が言った

「ま、いつか。バイトのネタに元々こいつの動向調べてくれて頼んだのあいつだし。ま、見返りに女の子紹介してくれるって話だったから乗ってやったんだし、こんな意気地無しの負け犬に知られた所でどうって事ねえしな」

どうやら山城の差し金らしい。

あいつは藤谷に僕のマンションでの行動を観察させ、それを聞いたあとでバイトの上田や店長にネタとして話していたのか

それはとても許せるものではない

それで店長に冷たく扱われ、上田達に言いように扱われているとしたら

山城のやっている事はとても許容出来ない

出来る事なら奴を殺してやりたい

怒りに身を焦がし、僕はいつの間にか土下座を解いて立ち上がり、
両の拳を白くなるまで指を握り締めていた

「おい。何勝手に土下座やめてんだよ」

その声とともに藤谷の右拳が僕の頬を殴り飛ばしていた

「うぐっ！」

不意を付かれた一撃によって僕は玄関前から居間の近くまで藤谷に吹っ飛ばされていた

「お、さすがデブ。山城の言うとおり根性まで負け犬らしいな」

そう言つて許可無く僕の部屋に踏み込んでくる藤谷

「ふーん。意外と何もない部屋だな。デブらしいと言えばそうだが、アニメのポスターくらいあるとふんでただけどな何しろ見た目がオタク臭いし」

そういいながら足元に転がっている僕をサッカーボールでも小突くみたいに蹴る

「味気のねえつまらない所だ」

そう言つて壁に貼ったあつたカレンダーを筆とり、無造作に投げ捨てる

居間に上がり込みテーブルをひっくり返す

気まぐれで買った造花が飾つてある花瓶を叩き落とす

ガシャンと部屋の中にガラスの割れる澄んだ音が響いた

「悪い悪い。ちょっと会社でイラついた事があつた上にデブがうる

せえからついストレス発散しちゃったよ。

おいデブ、ここで俺がやったことは誰にも話すなよ。仮に話しても無駄だ。警察なんかに言っても無駄だぜ、山城のオヤジは結構偉いんだ、多少の事ならもみ消せる」

床に倒れたままで憎悪に満ちた目で上目遣いに藤谷を見上げる僕を見下しながら藤谷が勝利を告げるように宣言する

そして部屋の物を蹂躪し、破壊する作業に戻る

僕は許せなかった。藤谷を、山城を、上田を、松田を、店長を、僕を虐めたクラスメイトも、学校の先生も、親も、優秀な兄弟も、僕以外の人類も、こんな運命を与えた神すらも

だがどうすることも出来ない

今、部屋を蹂躪している藤谷を止める事すらも、山城に掴みかかる事も、上田達の押し付ける仕事を断る事も

自分の運命すらも変えることも

手に何かが触れる

嫌でも目に入る赤いグリップ

それは悪夢の発端の道具

あの蜘蛛を滅多刺しにした果物ナイフだ

僕にはそれが自分に対して問い掛けている気がした

このまま負け犬でいるか、藤谷に思い知らせてやるか

選択の余地は無かった

回答を引き延ばすといえのは藤谷の蹂躪を許すと言うこと。つまり山城に一生抵抗出来ずに永遠に虐げられるのと同義

そして僕は選択した

「・・・！」

それを筆り取るように掴む

銀色に輝く刃をグリップから引き出す

不思議な事に、体は何をするかわかってるかの様に動く

頭はびっくりする程に冷静だった

こちらに背を向けて足でベッドを破壊する藤谷の背中には驚く程無防備だった

躊躇は無い

アイツ等は奪う側だ

そして僕は今まで奪われる側だった

ただ、それが逆転するだけのこと

藤谷と僕の関係が

立ち上がり鋭い刃をあいつの背中に向け走り出す

残り3メートル

まだ気付いていない

残り2メートル

藤谷はベッドから抜きとったパイプで未だに家具の破壊活動が続けている

馬鹿な奴

感想はそれだけ

残り1メートル

ようやく藤谷がこっちを向く

驚いている

当然だろう、今まで散々見下していた奴がナイフを持って反撃に出たのだから

残り50センチ

あいつが手にしたパイプにようやく力を込める

残り25センチ

藤谷がパイプを振り上げる

その顔は子供の様に怯えていた

残り0センチ

果物ナイフが奴の脇腹に深く、僕の狙い通りに突き刺さる

どんくさいのはお前の方だ。ざまあみろ

僕は生まれてから初めて他人を嘲笑した

だが、藤谷はまだ倒れなかった
信じられないといった表情で水道の蛇口を思いつきり捻つた水の如く噴き出している自分の血液を眺めている

やがて、脇腹を右手で押さえながら前向きに崩れ落ちるようにして
藤谷が倒れた

「え？嘘だ、ろ？俺には山城だつ、て付いて、いるんだ。こんなに、理、不、事、が、」

藤谷は前かがみに倒れたまま、最後の力を向けて僕の方を向いたあと、途切れ途切れに負け惜しみを吐いて

僕はそれを見ている

勝ち誇るでもなく、死した藤谷を罵倒するまでもなく、ただ平静に次にするべき行動を取った

藤谷の体を仰向けにし、剥き出しの喉にナイフを突き立てる

ごぼり。と音をたてて噴水みたいに虚ろに開いた口から僅かに血が溢れた

死んだ後に血が溢れたのは生命活動が停止したばかりの心臓によって送り出された血液の流れが若干残っていたのだろうか？

それともトドメ前の最初の一撃で藤谷を殺し切れてなかったのか？

ともかく藤谷は死んだ

脇腹の大量出血の後に喉を完全に破壊されたのだ。生きている筈が無い

死んだ。

それを確認した後、湧き上がった感情それは大蜘蛛を惨殺した際にも感じたモノ、渴いた心を一瞬で満たす程の高揚感。いや、達成感

僕以外の奴に理不尽な死を与えてやつた
生まれて初めて他人の運命を支配した

「ははっ」

自然に笑いが漏れる

それは歡喜

[illegible]

大口を広げて哄笑する

気持ちが良かった

さっきまで自分を蹂躪していた奴に思い知らせてやったのだから

正直に告白すると

今の僕は間違いなくハイになっていた。

四話（後書き）

筆力向上の為に是非とも感想や評価をお願いします

五話（前書き）

正直言いますと今回の話は駄作です（ - 0 - ）
早い内にリライトするかも、、

五話

藤谷の死体を片付けるのには苦勞した

床に着いた血痕を残さず拭き取り、遺体の腐敗をなるべく遅らせるようクーラーの温度を一番低い十三度にまで下げた後、冷蔵庫の中に藤谷の体をそのまま運び入れしばらく冷凍庫にて保存するつもりだったが、僕は一人暮らして冷蔵庫もそれほど大きい物を買っていなかった為、普通の人に比べて若干身長のある藤谷の体は腰や肘を折り曲げてでも流石に入りきらなかった

面倒だし溜まっていた生ゴミと袋に詰めて緒に棄ててしまおうか？

という考えが頭によぎったが、それはあまりにも馬鹿馬鹿しい思い付きだ。いくら何でも藤谷をゴミ袋に包む場合にはかさばるだろうし、成人男性の体重を抱えながら五階もの階段を降りる労働は二時間くらいしか睡眠を取っていない僕には正直こたえるだろう。

エレベーターを使えば労力の問題は解消されるが、誰かに鉢合わせした場合は最悪だ。運悪く見つかって言い訳なんかを上手くできない僕が仮にその場をどうにか凌いだとしても僕の不信な行動や言動はそいつの記憶にはつきりと残る。

万が一そいつが警察に聞き込まみされたら大変だ

バレてもすぐに口封じをすれば確実に情報は漏れないだろうが不用意な殺人は余計なトラブルと証拠を生む

それ以前にゴミ処理業者が回収の時に、死体に気付いた時点でアウトだ

今は夜だとは言え先ほどの騒ぎを聞いた者もいるだろう。

尤も近所の誰もが藤谷にはも関わりたくなかった様子なので好奇心による積極的な詮索はしてこないだろうが。

管理人が藤谷と関わりたくなかったという点も好都合だ。それにあいつは友人の家に泊まり込む放浪癖があったので、数日間行方が知れなくても誰も怪しまないだろう。

ここら辺の所だけは藤谷の奴に感謝しても良かった。

もつとも、礼を言った所で本人は永遠に目覚めはしないだろうから意味は無いが

だから、死体は僕の部屋でしばらく保管する事にした

棄てるにしても処分するにしても時間を置きほとぼりが冷めるまで待った方が良い

あいつは性格上トラブルの種に事欠かないだろう。殺意を抱く人間が複数いてもおかしくは無い。今すぐに山の中に藤谷を埋めに言っただとしても車を持っていない僕には移動手段が限られてくる、夜中に大きな袋を担いだ人物は不審者として通報される恐れがある。そこで警察が来て事情聴取なんてされた日はそれこそジ・エンドだ

なるべく死体は分割して状況を見てから日を選んで目立たないように処理すればいい

そう考えると行動を起こすのは容易かった

風呂場に藤谷を引っ張っていき

台所からある物を持ち出してくる

先程のナイフなど問題にならない長さの刃渡りを持ったそれは主婦お馴染みの台所包丁だ

ふと藤谷の首に包丁の刃を当てながらある思いが浮かぶ

何故クズとは言え人を殺してしまったのにもかかわらず、僕はこんなに平然としていられるのだろうか

実際藤谷は殺されても仕方のないほどにマンションの住民から恨みを買っていたとなるとこれは本人の行いに対して当然の報いなのであり仕方の無い不可抗力なのだろう

だから僕がやらなくても誰かが藤谷を殺した筈だ
そう納得し腕に力を込める

“ごりっ”

死体の首の半端まで沈みこんだ包丁は一気に骨まで届き骨が刃によつてなにかが擦れるような、なんとも言えない鈍い音がした
僕は刃の背に手を添えて再度全力で包丁を押し込むが首からの手応えは変わらずにそれ以上切断する事が出来なかった

「チッ」

事がなかなか運ばないことに舌打ちをする

果物ナイフより随分と刃渡りが長いとはいえ、ただの包丁と素人では人間の首を切り離すのは難しい

このまま死体を処理できずにいずれば殺人がバレてしまうのではないか？

根拠の無い焦りが僕の頭を埋め尽くす

しかし、その時何時かの日曜で見たホラー映画の一場面がビジョン

となつて脳裏を通り過ぎる

そのとき僕の頭の中で何かが閃いた

あれを使うか

僕は寢室の押し入れに行き、しばらく使われていなかった埃を被つた道具箱を見つけるために物色する

目当てのものはすぐに見つかった

幾つもの錆がついた小さな刃を規則正しい並べている道具は木材工作用鋸だ

風呂場まで戻り躊躇無く刃先を藤谷の首に当て、後ろに引く

“ギコ、ギコ、、ギコギコ”

工作用鋸は本来望まれなかった役割を押し付けられながらも、背骨をぎこちない音を演奏しながら遅々とだが確實そして徐々に骨を絶ち肉を裂き首を切断し己が持ち主に望まれた目的を果たしていく。そして首と胴体が文字通り薄型一枚で繋がっている状態まで切れると鋸を引き抜き包丁に持ち替えて首に残った皮を綺麗に切りとる。丁度、図工で木材を切断した後に残る切りのこしを処理する時と同様に行う仕上げの要領と同じ

切り取った藤谷の首は血が垂れないよう新聞紙に包みビニール袋に入れ、冷蔵庫にて保管した

身体の他の箇所も先程と同様に細かく切断していく

腕、脚は根元から各間接ごとに

胴体はそのままに

生前に比べ随分とコンパクトになった藤谷をゴミ処理用の黒いビニールに無造作に放り込み袋の口を締めそれを再度ビニール入れる

この死体を包んだ二重の黒ビニールによりある程度の強度と隠蔽性を獲得した

これなら見られてもすぐにバレることは無いだろう

死体が入った袋一式を冷蔵庫に放り込みようやく一息ついた

バラバラに分割された藤谷が冷蔵庫に収まったせいで、スペースが足りなくなり床に投げ出された邪魔な食料を賞味期限に近いものから手に取る

玉葱、人参、卵二個、ベーコン一袋、a c t、

そのまま腐らせるのはもったいなかったので、他に適当にチヨイスした野菜と冷凍保存したご飯と組み合わせでチャーハンを作る
二、三十分位の料理で炒めた野菜の香ばしい匂いと共に料理は出来あがった

作業と調理の後で体が疲弊していたけれど、殺しの後の緊張感と一仕事終えた後の疲労そして空腹感から、時間帯には午後11時の遅すぎる夕食そして今の季節はちょうど夏場の盛り。夜中だとしても十分に気温は高くいまだに暑いというのにも水すら飲まずに一気に貪ってしまった

“ 美味しい ”

ここ一日中なにも食事を取っていなかったからだろうか？このチャーハンは以前食べたものよりも群を抜いて美味だった

ふと喉の渴きを覚え一週間ほど前に買い置きした二リットルの麦茶取り出し、直接注ぎ口から飲む

一気に飲んだ褐色の冷たい液体は喉に流れ背筋から脳天まで突き上げるような清涼感をもたらしてくれた

普段は自炊自体あまりしない僕だったけど、これほどまでに上手い食事が取れるなら毎日調理しても良いとまで考える

違う。特別に飯が美味しいのではない

死体の後始末という普段は決して行わない他人に見られるとマズいといった緊張感を同封した刑事法に触れた“作業”は今勤めているアルバイトなんかでは絶対に味わえないであろう心地良い達成感と疲労感を僕に与えたそのときの多大な精神的負荷の後で行う食事は疲れた心身に平穏と落ち着きを取り戻し、癒やしてくれるのかもしれない

他者と入らぬストレスを抱えながら行う作業がくだらない仕事だとしたら、今僕が感じている緊張感の後の程良い疲れこそ正当な労働の対価と言えるでは無いか？

「くくっ」

口から忍び笑いが漏れる

こんなに気分が良い感情を味わったのは何年ぶりだろうか？

そう考えが至る内に眠気で瞼が重くなる

きつと満腹感そして殺人を行ったストレス、死体処理の疲れなどが僕に束の間ではあるが安心感を与えてくれたのだろう

そう悟ると睡魔に抗う気力も失せ思考も少しずつ曖昧にぼやけていく

もう寝よう

その思いを最後に僕の意識はいきなり視界に暗幕を被せられた様にシャットアウトする

このとき、先の悪夢の事はすっかり頭に入って無かった

五話（後書き）

評価、感想ございましたら是非ともお願い致します m (_) m

六話（前書き）

遅くなりましたが六話目です。

今度から執筆速度を上げたいと思いますので、感想、評価、応援等
もよろしく願います（ぺこり

六話

幸い悪夢を見ることは無く充分な睡眠は取ることが出来た

しかし、目覚めた僕を迎えたのは朝日の柔らかな陽光の下でさえずる小鳥の声とバイトの始業時間をつくに超えた時刻を指し示しているブラックカラーの安っぽい目覚まし時計だ

僕は気だるげに床から身を起こす

藤谷を殺した事で発生した精神的ストレスに比べれば遅刻程度の出来事は悩むほどでもない

人間的にクズとは言え人を殺して一晚経ったにもかかわらずそんな事を思考できた僕自身の冷静さに驚く

実際藤谷は殺されても仕方ない程迷惑極まりない奴ではあったし、僕が殺さなくてもいずれは誰かの恨みを買って似たような悲惨な結末になるのは目に見えているだろうから仕方がないのかもしれない問題は僕の人間としての罪悪感云々よりも僕の犯罪が露見しない事だった

行方が知れなくなった藤谷が警察に搜索される

もし仮に僕がバイトを休めば藤谷の失踪が何らかの事件に繋がると警察が判断した場合、マンション住人全員が容疑者にリストアップされるのは当然の流れだろう

その時、間違いなく先に疑われるのは隣人で藤谷に恨みを持っていた僕だ

最近の警察の取り調べは凄まじい

一度目を着けられたら最後だ。悪質なストーカー紛いの尾行と用意周到な聞き込みで必ず事件につながる何らかの手がかりを掴むだろう

それでも犯人が捕まらなければ容疑者を捕まえて人権を無視した強引かつ執拗な尋問と、ヤクザ顔負けの暴力を用いてでも無実な奴を半ば脅迫的に罪を被せて犯人に仕立て上げられてしまう

実のところ犯人である僕が言うのも何なんだが、そんな脅迫紛いの捜査を受けた場合は口下手で要領が悪い僕ではどうすることも出来ない

最悪の場合は尋問に引っかかって藤谷の死体に関するこつこつやり喋ってしまうかもしれない

そうなれば最悪だ

警察は僕をターゲットにし、動向を徹底的に調べあげ、いずれは証拠を掴む

自体捜査で冷蔵庫で眠っている藤谷が発見されればもう言い逃れは出来ないだろう

残りの人生を臭い豚箱の飯を食って過ごしてしまう羽目になる

それは想像しただけでもゾッと背筋が凍る未来図だった

これまで口々に人生を楽しめず、藤谷という死んで当然のダメ人間を消しただけで税金を貪り食っているだけの公僕によって犯罪者の烙印を押され数十年間も自由を拘束される

昨夜の死体処理に伴う疲労が取れていないのはネックだったが死体を完全に処理するまでは疑惑の目が向けられないように普通に生活を送るしかない

とりあえずはバイトに行くか、

僕はため息をつきながら玄関へと重い足を向けた

「お前さあ…遅刻してんじやねえよ。昨日もギリギリ間に合ったじやねえか」

そんな僕を待っていたのは虫の居所が悪いらしく、冷たく眼差しを

向けてくる店長だった

僕は店長の気にさわらない程度の声量で弁解する

「すみません。昨日寝るのが遅くなって」

「趣味に没頭するのも良いけどさあ、みんなに迷惑かけるくらいならやめてくんないかな？」

店長は僕の言葉を遮って放った一言は

“ どうせろくでもない事でもして睡眠時間が取れなかったんだろう？ ”

そんな店長の本音が見え隠れしているようだった

「それは、、」

僕は口を濁らせる

『 逆恨みの末に殺人を犯した後、死体の始末をしていました 』 なんてとてもではないが言えるはずもない

たどたどしい返答を続ける僕を見て店長は鼻を鳴らして不快そうに吐き捨てた

「 口答えするくらいなら真面目に仕事やれよ。山城や上田から聞いた話だと、お前昨日は居眠りしてサボってたみたいじゃないか 」

反論したかったのだけれど

昨日は仕事中に寝不足で意識が何回かブラックアウトしたのも事実だ
山城達はそれをスパイして店長に報告したのだろう

多分、自分達に都合の良いように多少の脚色を加えた後で

仮に店長何かを言い返したとしても、いまや僕の事を一方的に敵視している山城や上田と仲良くやっているこいつには何を言っても無駄だろう

それどころか僕がお気に入りの山城や上田を感情のままに叩いているとしか思わないだろうから

店長はだるそうな仕草でカウンターに体を寄りかからせ胸ポケットに入っているであろうタバコの箱を人差し指でなぞりながら言った

「あー、もういいよ。お前の言い分はさ聞きたくないからさやる気ないからもう明日から来なくていいよ。ウチには山城達が頑張ってるからさ、首になりたくないんなら真面目に働きなよ。」

こいつは山城達三人が自分達の仕事を僕に押し付けて楽をしている事を知らないのだろうか？

いや、知らないだろう

店長の仕事は一日中休憩所に居座ってタバコをふかしながら売上高の計算やいかがわしい雑誌を眺めていること、そして山城達と喋ったりするくらいなものだろう

肝心な仕事はバイトに任せ、自分は楽をしているのだ

そしてその割を喰うのはいつも僕だった

残業代が出ない長時間労働や、店の後片付けをさせられるのもいつも僕の役割だった

こいつは何を言っても無駄だ

だから僕は無言だった

こういう時はひたすら従順な態度を続け相手の怒りが治まるのを待つのが最適だそれに店長には僕が何を言っても信じないし聞かないだろう

「反省してるんならさっさと持ち場に着けよ、お前には今日から今まで山城達に任せてたゴミ当番もさせるからな。サボるんじゃないぞ！」

僕に対して不快感を隠すつもりすら全く見せないで、店長が怒鳴った後、胸ポケットタバコを取り出しながら休憩所へと入っていく

その不機嫌な後ろ姿を眺めながら僕は

“こいつもムカつくから藤谷みたいに殺してしまおうか？”

ポケットの中に入っている果物ナイフを弄びながら

当然のようにそんな事を考えていた

七話（前書き）

すみません。更新が遅れてしまいました

七話

僕が仕事に入った時でもカウンターで山城一行は他の面々達といつものようにおしゃべりし、いつものように僕に仕事を押し付けてきた返却されてきたビデオを棚に戻しているのを見るとカウンターから山城がにやついてこちらを盗み見てくる。

その顔に浮かぶのは相変わらず僕に対しての侮蔑と嘲笑

できれば睨みつけてやりたかったが、あいつが店長に変な陰口を吹き込むと最終的に僕が困ることになるので無視するしかなかった

そんな事情で自分に文句を言って来ない理由を恐らく山城はよくわかってるのだろう

後ろからいつの間にか近づいていた山城は僕の傍らに置いてあったビデオの入ったプラスチック製の籠を軽く蹴飛ばした
それで中に収まっていたビデオがぶちまけられる

「お。悪い悪い」

自分のせいで床に散らばったビデオを拾おうともせずへらへらと締まりの無い顔笑いながら満足気にカウンターに戻る山城

僕は無言のまま床に散らばったビデオを籠に入れ直し仕事に戻る
昔から変わらない

そう。僕はいつも虐げられる側だ

虐げるのは友情などの薄っぺらい人間関係で結びついた他人だけでは無い

僕を産んだ実の肉親からも、そういう連中からされるのと同様に何故だか毛嫌いされていた

『母さん、』

『また学校で何かあったの？お前の担任の先生は何もないから大丈夫だっていったでしょう？それよりわたしは塾に哲也を連れて行かないといけないの。だから後にしてくれる？』

『母さん。この前は何か合ったら母さんに相談しろって言ってたじゃない』

そこで母さんの表情が一変した

鬱陶しいそんな顔から鬼のような顔に

『うるさい！厄介事ばかり持ってくるお前の事なんか知らない！どうせまた哲也を羨ましがって私の気を引こうとして嘘をついているんでしょー！』

『ちがうよ母さん、学校で畑山が僕のランドセルや教科書を全部捨てたんだ。それだけじゃない上履きや体操服も』

『ねえ、信ちゃん。そんな事が起こる背景にはあなたに一番原因があるってことがわかるの？』

急に母さんは笑顔になった。

ただし僕は知っている

それは決して母親特有の子供に向ける慈愛の笑顔なんかじゃない

その証拠に口だけを弧状に無理やりを曲げて歪んで作った笑顔は目だけは恐ろしい輝き爛々を放ち僕に対して憎悪を向けており、全く笑ってなどいなかった

『それはお前が悪いからだよ信二！』

母さんの拳が僕の頬を打ち、乾いた音が響く

『お前がッ！あの人の血を受け継ぎながらッ！そんな醜い容姿で、馬鹿で、母さんの考えて居ることもわからない愚か者だからよッ！哲也を見なさい！容姿端麗、成績優秀、将来有望、人には優しいし人望もある！お前と違ってたくさん友達からも好かれてるわ。』

『かあさん、おねがいだから、ぼくと哲也と比べないで、』

僕は懇願した。しかし

『うるさい！あの人の血を継いだのに、なんでお前はこうなんだ！このブタ、クズ、ゴミ、死ね！お前なんて死んでしまえ！』

再び鬼相を見せた母は立ち上がって僕のお腹を何度も踏みつける

決して顔は殴らない。傷ができた場合露出するからだ

だから服に隠れているところだけに暴力を振るう

痛い、痛いよ、誰か止めて…………

『お母さん。はやく塾にいこうよ。友達が待ってるからさ』
そこに哲也が来て言った

そして母は僕に一発蹴りを入れると僕の弟である哲也に向き直る。

その顔は僕に向けていたのとは別種の笑顔
僕が母に求めてやまなかった本物の愛情が籠もった笑顔が哲也に向
けられていた

『ごめんなさいね哲也。あなたのお兄さんがまたわがまま言っ
てね、母さんちよっと叱ってたのよ』

『じゃあ今から塾に行くんだよね』

『そうよ。すぐに私が送って行ってあげるからね。哲也は支度終
ったでしょう？なら、すぐに行けるわ』

『早く行こうよ。おかあさん』

『はいはい。わかりましたからね』

そういつて母さんは再び微笑む

それは元々美人だけに誰もが見惚れるきれいな笑顔だった

そして僕には向けられず弟に注がれた愛情の証

『それじゃあ、母さんは車を出すから哲也はそこで待ってて。すぐ終わるからね』

『うん』

哲也の返事を聞き母さんが玄関から出る

母の姿が消えたその時、哲也がこちらに顔を向けた

その表情は嘲笑でも憎しみの表情でもない

――お兄ちゃんかわいそう

弟に向けられたのは僕への憐れみの表情だった

その言葉の裏には

“お母さんにいじめられてるのが僕じゃなくてよかった”

そんなニュアンスが含まれていたであろう事を僕は子供特有の直感力で感じ取ってしまった

それを脳内で認識し確認してしまった瞬間

気付けば、僕は哲也を床に押し倒し首を締めていた

『…お兄ちゃん、いた、いよ。やめ……て………』

『お前が、お前なんかッ、私の哲ちゃんに触れるなあッ！』

三撃目

唇が切れる

四撃目

舌を噛んだ

五撃目は眼球に当たり、激しい痛みで再び意識を失いそうになる

だが、続く六撃目で意識を手放す機会は阻止された

後はひたすら拳のラッシュ、ラッシュ、ラッシュ。

僕はなすがままにの母さんに暴力を振るわれていた

『止めてよおかあさん！お兄ちゃんが死んじゃう！』

哲也のその声を最後に

僕の意識は途切れた

今更なんの拍子でよりによってあの出来事を思い出したのかはわからない

もしかしたら藤谷を殺した時のストレスが昔のトラウマを蘇らせたのかもしれない

おまけにあの頃から勤務中にも関わらずに僕の意識は昔の回想に引き込まれ仕事は疎かになり、挙げ句の果てには注意不足から洋画コーナーの棚をビデオ共々盛大に倒してしまい、キレた店長直々にクビを言い渡されてしまった

その様子をあの山城や上田がカウンターで覗き見ながら笑いを堪えて背中を震わせていたのを思い出す

「馬鹿な連中め、僕が居なくなってもお前らの仕事が増えるだけだ。ざまあみろ」

誰も聞いてはくれないだろう負け惜しみの独り言は

虚しく美しい夕日の景色の赤い大気の中に溶け込んでいった

八話（前書き）

なんかグダグダになってます（汗

プロット位作つとけばよかったなあ、
つか会社辞めたい

あと、麦茶飲みながらコレ読める人ごめんなさい m (_ _) m
ちなみに僕は緑茶派です。

八話

バイトをたった半年の期間でクビになってしまった僕はマンションの部屋に戻りお気に入りソファにだらしなく寝そべり現状を憂い溜め息を付く

こうなったのも一カ月前に入ってきた高卒風情のフリーター山城達の陰険な虐めせいだ

あいつ等が居なければ僕はもう少し貯金を貯められたかもしれない
今後の事を考えてはみるが特に趣味など持たず、月々の出費は家賃と電気代、食費といった必要最低限なものにしか使っていなかった
ので貯金は二百万程あった

贅沢をしなければ働かなくても一年位は充分な生活が出来る金額ではあるかもしれない

しかし僕は貯金をそんな無駄なことに使う気はなかった

今後はどこかでバイトを見つけるしかないだろう

そして今までのケースから考えるに短くて半年、長くても一年と少しの期間働いた後で結局止めさせられる

何の目的も持たず、趣味も持たず、友人も持たず、将来の夢も持たずにただ金を得て酸素を吸って二酸化炭素を排出しながら警察の陰に脅えつつただ生きているだけのフリーター生活

こんな生活が充実しているとも思えないし、楽しいとも思えない

二十五を過ぎたが未だ年下の者に舐められ、未だに就職活動すらマトモにしていけないこの体たらく

面倒なだけで中身が伴わない人間関係を強要される会社内の付き合いも、大学や専門学校に高い金を払って進学し、新たな道を模索するのも面倒臭いし、さほど魅力を感じなかった僕は高校を卒業してから、ずっと続けている不安定なフリーター生活

いわゆる宙ぶらりんな状態で日々を生きてきた

そしてそれを悪いと自覚しながらも変えようとすらしなかった

僕は“生きること”に対して疲れていると思う

それは今までの事を省みれば当然と言えた

何一つ良いことがなかった人生を振り返る

今まで学校での友達出来ず、クズどもの居場所を守るためイジメという手段でダシに使われ、家庭でも母親のサンドバック変わりにストレス解消の道具にされた
その過程で生まれた疑問

“何故、僕だけがこんな目に合うのか？”

正直解らない、もしかしたらいるかも解らない神様とやらの気紛れなのかもしれない

そう考えるとフリーターを今までずっと続けているのは社会のシス

テムに組み込まれ利用されないが為の僕なりの処世術。つまりは世の中に対しての僅かばかりの反抗なのかもしれない

思考の堂々巡りに陥っている内に気付くと喉の渴きを感じていた

そこで麦茶を飲み少し落ち着こうと考え、冷蔵庫の扉を開いた
昨夜少し飲んだ筈だが、昨日開けたばかりの二リットルペットボトルの麦茶はまだまだ残っているはずだ

冷蔵庫の扉を小さく開き、麦茶を取り出す

そこで、昨日と変わらないまま血まみれの黒ビニールに包まれた藤谷の生首の虚ろな視線と目が合った

その時僕は奇妙な感情を抱いていた
そしてそれは藤谷に対しての罪悪感や醜い首だけの遺体に向けられる嫌悪感とも異なるものだった

胸から湧き上がってくるその感情を強いて例えるならばそれは達成感に似ていた

言うなれば不思議なもので昨日の殺人は僕としては初めて他人を蹂躪する体験だった

何も特技や名誉も持たずに初めてやってのけた事が人殺しという事実
世間からは背徳行為であり、最大の禁忌と呼ばれるソレをやらかった時の僕の心境はどうだったか

あの時僕は、、

『自分にとって不快に感じていた藤谷を力でねじ伏せ殺し、他者の命を奪った事に対して生きている実感を噛み締めていた』

膝がガタガタと震え出す

今更ながらに罪悪感と藤谷を刺した時の感触が蘇ってくる

麦茶のペットボトルを片手に持ったまま僕はその場で固まった

そして開けっ放しで温度が上がっているであろう冷蔵庫の扉を力任せに閉じ、藤谷を視界から強引に完全に遮断する

それは刑事上の罪で刑務所にぶち込まれる事を今更恐れた訳ではない

怖かったのだ

自分が

藤谷の生首を眺め、達成感に浸る自分の事が何か人間ではない別の生き物のように思え吐き気がした

落ち着け

落ち着くんだ

そう言い聞かせテーブルから洗剤がもつたいないとか適当な理由をつけて滅多に洗うことのないマグカップを掴み麦茶を注いで一気に呷る

澄んだ褐色の液体はその冷たさで幾分かの落ち着きと冷静さを取り戻させ、僕に僅かばかりの安心感をもたらしてくれた

「……ふう」

心臓の動悸が収まり冷静になってくる

そしてその冷たさに再び縋るため再度マグカップに麦茶を注ぎ、今度は少しずつちびちびとゆっくり飲み干す

その時

一杯目の時に感じなかった違和感を感じた

そして口の中に入ったモノに対して驚愕する

本来なら考えられないモノ

麦茶に混入していたのは体長二センチ程の小さな蜘蛛だった

吐き気を覚えたつぎの瞬間。

僕はトイレに行き。体に入ってしまった麦茶を吐き出そうと喉に手を突っ込む

そして便器に中身をぶちまけた

白い便器にへばりついた黒い点みたいなものは八本脚を丸めた四匹ほどのさつきと同様の蜘蛛、蜘蛛、蜘蛛、蜘蛛。

急いで居間に戻りすぐにペットボトルの中身を流しに捨てる排水溝に吸い込まれる褐色色の液体の中に十を優に超えるあの黒い点が一緒に流れていく

気付くと部屋に冷房がかかっているにもかかわらずＴシャツは真夏の外で運動した後みたいにくっしより濡れて肌に張り付いていることに気付く

震えが止まらないのはさつき飲んだ蜘蛛入り麦茶の冷たさではないコンナモノを平然と飲み干してしまった僕自身の迂闊さもさること

ながら、蓋をした麦茶に何故あれだけの数の蜘蛛が混入しているかといった事実にも驚いていた

アレは決して製造段階で不慮に混入したものではなかった

飲料水や冷凍食品などの食料関係の製造工場は食品を扱う関係上、管理は徹底しているはずだ

そう。それこそゴキブリ一匹侵入出来ない位に

ゴキブリより体長が小さいとは言え一匹だけならまだしも二十匹近くの蜘蛛が同じペットボトルの中に混入していることなど、実際にあり得るのだろうか？

第一そんな事になったら商品の回収どころか間違いなくニュースで騒がれた挙げ句メーカーが散々叩かれ、倒産の憂き目に合うはずだし
しかも昨日麦茶を飲んだ時には蜘蛛は入っていなかった

そう

つまり・・・

そのあまりに非科学的な可能性に考えが至ると同時に体が震えだした

謎の痒み

悪夢

噛みつくイエグモ

蜘蛛の脚

蜘蛛入り麦茶

共通するキーワードそして結びつく糸

どう考えてもありえない。他人に話したら妄言だと一笑されるだけの戯れ言

しかし最近の不気味かつ不可解な全ての出来事に納得がいくそれは先程の自分に対しての恐怖とは異なった文字通りそのものに対して抱く原初の未知に対する恐れ

もしかしたら数日前に惨殺した大蜘蛛に関係があるのかもしれないならば数日の不可解な出来事は――

プルルルルルルルルルル♪

突然響いたデフォルト設定の着信音で僕の思考は中断された

しかも、携帯電話の画面にある名前は

『哲也』

実の弟であり

昔、母さんに殺されかけた時に、僕が激情に任せて殺そうとした肉親の名前が液晶画面に表示されていた

八話（後書き）

感想、評価、批判等ございましたら、遠慮なく申しつけ下さいm
――m

九話（前書き）

なんか当初の予定から結構ずれてます（汗

遅くなりましたが評価、感想くださったかたありがとうございます
たm（――）m

非常に励みになります

予定より多少長引きましたがこれからも完結に向けて執筆していきますので、応援お願いします。

九話

『哲也』

その名前は僕にとって重大な意味を持っていた

僕の実の弟であり同じ母親から生まれた肉親

だが、僕との共通点はそれだけだ

哲也は僕なんかとは違い頭が良かった 学歴でも優秀な成績を残し、生活的な面でも要領は良かった

容姿も僕に比べて格段に恵まれていた

小柄ではあるが色白だった幼稚園時代はは男子と言うより女の子と言われても違和感ない童顔を持った哲也は当時から女の子達にも人氣があり、よくままごとなどの遊びにも加えてもらっていた
成長しきった今でもイケメンと言っても良いほどのバランスが取れた顔付きになっている

そして友達の居ない僕とは違い、外見だけではなく人望も備えていた

脳みその中に筋肉しか詰まっていない力づくで人間関係を構築している体育関係の連中とは明らかに違った

生来の優しい性格から子供から年上にまで好かれていた

そして何でも出来た

スポーツだろうが料理だろうが勉強だろうが望まれればどんな事で

もこなしたいいずれも人並み以上の業績を打ち立てた
僕はそんな哲也を疎ましいと思っていた

僕よりもたくさんの友達がいたから

僕よりも運動や勉強ができたから

生まれながらにして何でも持っている哲也が憎かった

哲也の才能の一部が僕に備わっていれば僕の人生は有意義になっていたのだろうか？

しかしそれ以上に気に食わなかったのは

“ 哲也が母さんに愛されていたからだった ”

何で僕はこんなにも人から疎まれるのだろうか？

そのせいで色々な事を諦めるしかなかった

仕方無く挫折するしかなかった

友達を作ろうとしても

周りが近寄って来ない

話しかけるでも避けられる

いつの間にかクラス内で孤立している

それだけでは飽きたらず暴力恐喝盗難罵倒学級裁判などの虐めに合う

おかげで何かを成し遂げようとする気力は失われた。ただ理不尽な暴力に脅えるだけの日々が続いた。

あの頃は、何故自殺しなかったのか気になる。

なんであんな地獄のような日々をおくりながら僕は生き長らえていたのだろうか？

それは多分虐められることよりも自分の命が失われる方を恐れていたからだと思う。

何故なら特技もビジュアルも友人も好きな趣味すら持たなかった僕は自分の命しか持っていなかったから。

昔、一度だけカッターナイフで手首の頸動脈を切り死のうと思ったことがある。

例のランドセル事件よりも後の話
学級裁判の直後だった。

あの頃僕に話し掛けてくる連中がいた。
男子二人と女子一人のグループだった気がする。

彼らは僕と一緒に遊んでくれた、担任の先生の事等、他愛もないことをしゃべって笑い合った。

それから数日後に彼らはとある『イタズラ』を僕に提案してきた。

それは給食費を盗んで学級みんなを驚かせてやろうというものだ。

った

勿論盗んだ給食費は一晩経ったら教卓の上に戻す

そして実行犯の役割は僕になった

別に押し付けられた訳でも初めから役割が決まっていた訳でもない

僕の方から進み出たのだ

何故なら僕は目立ちたかった

せつかく出来た友達に良いところを見せたかった

そして何よりも友達のために何かをやってあげたかった

そして計画は実行され、僕は盗んだ給食費を女の子に渡した
事件の結論から言くと

給食費は戻ってこなかった

僕は女の子に事情の説明を求めたが、シカトされた
他の男子二人も同様だった

その日の授業が終わった後に、先生はホームルームで給食費がなくな
った事についてクラス全員に言った

「先生怒らないから給食費を取った人。正直に立ってください」

僕は立たなかった。本当は正直に立ってみんなに謝りたかったが、
怖かったのだ

友達の三人を裏切るのが

それは決して報復を恐れての行動では無かった

僕の事が露見して友達の三人に被害が及ぶのが怖かったからだ

なのに、

「先生。私は給食費を盗った犯人を見ました」

僕達のグループに入っている女子が手を挙げた

先生が驚いて訪ねる

「誰なの？言ってみて」

「それは、信二くんです」

僕が給食費を預けた女の子が

こちらを向いて勝ち誇った顔で見下しながらそう言った

クラス全体の目が僕を見ていた

二対の三十人もの多種多様な視線はそれぞれ怒り、侮蔑、冷笑を浮かべており、子供ならではの残酷かつ容赦ない視線を僕に突き刺し責めていた

更に控えめながらもゴミか汚物を見るかのような、自分の教え子には決して向けるべきではない視線で僕を眺めつつ先生が冷たい怒りを抑えつつ、呻くように告げた

「信二くんのお母さんと呼んで一緒にお話をしないとね」

母さんにこの事を知られると思った僕は、次の瞬間に目の前が真っ黒になったように感じた

遅くなった帰りの後僕は家で母さんに滅茶苦茶に殴られた

今度は顔面だろうが腹だろうか後頭部だろうが理不尽な罵声とセツトでボコボコに殴られた

哲也は塾に行っており、不在らしかった

僕は辛かった

母親に暴力を振るわれるのは多少慣れていた

だが、本当に堪えたのは友人だと思っていた三人に裏切られた事だった

翌日、学校へ行き彼らを問いただそうとしたが、彼らに何を言っても冷たい笑いを返してくるばかりで僕がかかる言葉は全て無視された

そこで僕は全てを悟った、解ってしまった

彼らは、僕をそのかして給食費を盗ませる為だけにしばらく友達ノフリをしていただけなのだという事実を

僕は悲しかった。午後の授業内容なんて少しも頭に入らなかった

そして、帰りのスーパーでなければなしのお金を出してカッターナイフを買った

自宅、夜にて僕は銀色に光る刃をナイフより引き出す

出来れば包丁が良かったのだが、台所では何時も母さんがお酒を飲んでいたので持ち出すことは叶わなかった

刃が小さいとはいえ手首を切ればたくさん血が流れて僕の命は確実に失われるだろう

そしてナイフの刃先を手首の頸動脈付近に当て皮膚に少しずつ突き刺す

皮が切れて傷から血の玉が滲み出る

僕は怖くなった

この赤い血が全てなくなったら僕は死ぬのだろうか

辛い事への逃避だと今まで甘く考えて考えていた『死』が

肉体の死滅による自己の消滅という虚無的で恐ろしい『現実』へとすり替わっていく

僕が死んだらあの三人組は一体何を思うだろうか？

いや、なんとも思わないだろう。

僕の事なんか忘れて今まで通りに日常を送るのだ

刃の冷たい感触が恐ろしく感じる

忘れ去られる

永遠に

それは肉体の死よりも恐ろしい

僕の存在そのものが死ぬのだ

誰も僕のことをすぐにでも忘れるのだ

クラスメートも

先生も

哲也も

そして、母さんも

誰も僕の事を気にもかけないというのは最初から無かった事にされるのと同じ

虚無への回帰

闇への帰還

それは何よりも勝る恐怖だった

“死にたくない”

そう痛切に思い、僕は鈍く光る刃を引っ込めた。

哲也はこの事を知らないし知る由もない

勿論、僕の苦労なんて理解しようとしないうと出来ないだろう

自分は成功しているから

自分の携帯にはたくさんのアドレスが載っているから

自分には大学生なのにもかかわらず週末に高い車で一緒にドライブする友人がいるから

自分にはどんな時も支えてくれる彼女がいるから

自分は母さんが応援してくれてるから

決まって不定期に架かって来る電話には決まって僕個人にとってはどうでも言いような自分への幸福事ばかり話す哲也を僕は憎たらしく思っていた

こいつは僕に自慢したいだけなのではないだろうか？

何度もそう考えた

しかしまと前に僕と話してくれる相手は哲也だけだったので無闇に突き放す事もしなくなかった

そして先程かかって来た電話は

「兄さん、俺の就職が決まったんだ。鈴木商事っていう貿易関係の大企業だから待遇は結構いいんだ。

今夜、兄さんのアパート近くに住んでる友達の家遊びに来てるからうまいところに食べに行こうよ。俺が奢るからさ」

僕がバイトをクビになったその日に哲也の就職先が決まったのは運命の皮肉と言うか、居るか居ないか判らない神様とやらの嫌がらせな気がした

哲也に奢らされるのはあまりいい気はしなかったが、仕事がない僕にとって生活費はなるべく節約したい

それに最近のフリーター生活のため料理店という大層な場所にもしばらく縁がなかったので、しょうがなくご馳走して戴く事にした

約束の時刻に合わせる為に、中身を片付けてない箆笥のぼろ服の中からそこそこまとりもの物を掴みだして着替え、外に出た

僕はその時、尾行してくる人影に気付かなかった

そして、そいつが僕の人生を大きく狂わせることも現時点では全く分かることすらも出来なかった

十話（前書き）

祝、十話突破！

十話

僕の住んでいるアパートのすぐ近くに哲也との待ち合わせ場所の公園はあった

午後八時を回り薄暗くなった公園内には遊ぶ子ども達の姿は見えず、時たま中高生らしきカップルが通りかかる以外は静かな様相を保っていた

そして公園の入り口に当たる門には一目で解る黒いスポーツカーが停車している

車に疎い僕には解らないことだが、鈍い光沢を放つマッドブラックで塗装されたその車はきつと高級車なのだろう

「兄さん」

車の運転席の窓が静粛なモーター音と共に開き、モデルと言っても差し支えがない青年が手を振る

「哲也か？」

「そうだよ、兄さん。」

久しぶりだね、八年ぶりだね。調子はどう？」

「今一つかな。僕は哲也みたいに要領良くないし、仕事のせいで余り暇が取れないから遊びに行く時間も無いんだ。」

「そう？…でも世の中って結構良く出来た仕組みだから上手くやれ

ばそこそこ楽しく過ごせるよ。」

それは、僕に対する痛烈な皮肉なのだろうか？

僕は全くと言って良いほど上手く行っていない

顔と人付き合いの悪さのお陰で何処へ行こうが蔑まれ、邪魔だと罵られ、挙げ句の果てに無視され、どのバイトでもトラブルが発生すれば責任を押し付けられてクビになる。

そんな僕を周りの連中は馬鹿共と一緒に酒のネタにし、笑いそして次の日には僕の事すらすっかり忘れてしまう

他人にいいように利用され、道具みたいに扱われ、存在自体を否定され、ご丁寧に記憶から消去される

こんな都合の悪い世界の何処が一体良くできているだと？

そう考えているのはお前だけだ。哲也

お前は世の中の人間から愛されている

僕と違って他の連中に必要とされているからな

だから僕の他人に必要なとされない苦しみなんて解るはずも無いだろう

「そうか、肝に銘じておくよ。」

本音はおくびにも出さずに形だけの了解を取り繕う

「ふーん、そう。」

ま、とりあえず乗りなよ兄さん。
車で店まで行くからさ。」

「わかった。」

僕はあまり解らないが、こんな高そうな車をどうしたんだ？
大学の合間にバイトしてるとはいえ、とてもすぐには買えるような物
じゃないだろう」

「結構見る目が有るんだね兄さん。」

俺の貯金だけじゃ足りなかったから母さんが少しお金を出してくれ
たんだ。」

…母さん、か

何時も哲也ばかりに構ってばかりだあの人は

僕は母さんの事はあまり思い出しなくなかったのでそこで思考を停
止させ、後部座席のドアを開けて左側のシートに腰掛けた

「俺の隣には座らないの？兄さん。」

「悪い。前の座席に座ると車酔いするんだ。」

違う

本当はお前の隣なんて座りたくもない

「そつなの？」

ま、とりあえずシートベルトだけは掛けてくれよ、警察に捕まっち

や大変だからさ」

「わかってるって」

そうしてる間に車窓から見える景色はだんだんと街に入って行き

市街地の中心から少し離れた郊外に近いとあるレストラン前に着いた

「ここだよ。兄さん

俺もたまに友達と来るどころなんだ。

まあ、値段はそれなりに高いからサークルの打ち上げとか、同窓会とかそんな時しか行かないけどね」

そう言つて頭をかきながら少し照れ隠し気味に笑う

憎たらしい

人への気遣い方を知らない僕と違って爽やかで他人に好かれる仕草を自然と出来る哲也が羨ましい

哲也は僕に対して一見イヤミを言っているようだが、哲也自身の明るさと性分でありそれを感じさせない

それを自然に出来ることが哲也本人の才能なのだろうか？

どうして僕はこんなにも他人から嫌われてるのに、コイツは友人が多いだけには飽きたらず彼女まで居るのだろうか？

世の中というのは本当に理不尽だ

「そうなのか？」

「バイトしてるって言っても大学生が稼げる金額なんてたかが知れてるからね」

「いいのか？僕なんかにご馳走して」

「どうしてそう卑屈なのさ。兄弟だろ？遠慮するなって」

「わかった、とりあえずどこでもいいから早く席に着こつ」

「そうだね。ずっと立ち話つても疲れるし、他の客に迷惑だからね」

「そうだな」

適当に頷き、さっさと窓側の空いてる席へ移動する

実は一目にこれ以上一般人の視線に晒されるのは耐えられなかったからだ

木製品の紋様をあしらったテーブルに頼杖を付き哲也が言う

「な、結構雰囲気は良いだろこの店は？」

「だな、客もそんな居ないし。ひょっとして予約制のレストランなのか？」

「そうだよ。今日は僕の就職祝だけ好きなものを頼んで良いよ兄さん」

ここしばらくの間に立て続けにトラブルが発生した嫌なことを忘れるために久しぶりに酒が飲みたかったので、メニューの中から見栄えが良くて美味しそうなものを適当に選んだ

「じゃあ、これとビール大を」

「兄さん。ボタン押せばウェイトレスが来てくれるから俺に言わずにその時に注文しなよ」

哲也が苦笑しながら僕に注意する

「わかった。気を付けるよ」

その後、僕は運ばれてきた料理に舌包みを打ち、久しぶりに兄弟同士で食事を取った

色々な話を話した

哲也の大学の事、自分達が所属するサークルが主導して行ったイベントの事、哲也と哲也の彼女との馴れ初め、現実には小説より奇なりと言った感じの学園で起きた恋愛劇など

それを語る哲也の目は子供みたいにキラキラとした光を湛え、話をしている最中は自分の青春を記憶のメモリーから呼び出し、思い出を反芻することに楽しかったその時に体から魂だけ飛び出してその時間を頭の中で再体験しているのだろう

僕はそれを羨ましく思った

大学まで行かなかった僕の学園生活は高校生までだったがそれは哲

也のように記憶というキャンパスに虹色で様々な絵が描かれているとしたら僕のそれは適当に灰色で塗りつぶした落書きみたいなものだった

そして今はその灰色一面で塗られた子供のイタズラ書きにも満たないみずばらしい絵は社会に入ってから人間の暗黒面を具現化したかのような墨汁で真っ黒に染め上げられてしまった

就職の失敗

度重なるバイトでの虐め、そして逃避

同僚からは蔑まれ、

後輩に当たる年下達からは馬鹿にされ挨拶すら無視される

僕は悪くないのに人すら殺してしまった

この後に及んで酒に弱い僕がビールを頼んだのはそんな辛い現実から逃げたかったのかもしれない

だが、僕の場合、哲也と違って酒を飲んでも飲んでも過去の悪夢が再生されるばかりで

逃避などできそうにない

冷たく、冷酷な現実はいつも僕を見張っている

それは常に僕の背後一歩手前から監視しているのだ

僕が幸せにならないがために

ここに至って僕の意識は朦朧としてきた

沢山呑んだアルコールがようやく効いてきたのだ

僕は眠気に逆らわなかった

冷たい世界は黒い空気のようなもので望む望まないといつも目に入
ってしまう

ならば今だけでも眠りに着いて忘れよう
後の事は後に考えればよい

せめて、今夜の夢だけは

哲也の様に幸せになれますように

十一話（前書き）

感動の最終回ッ！

これまでアクセスしてくれた人
有難うございましたッ！

次回作はファンフィクション短編

『仮面ライダー○○○』

をお送り致しますっ！

1ヶ月半に渡って付き合ってくれた方

感想をくれた方

1日に何回もアクセスしていただいた方

『有難うございましたッ！』

十一話

「兄さん！」

声がする

「起きてくれよ。兄さん！」

頼む、眠いからしばらくこのままにして置いてくれ

「兄さん。ちょっと聞きたいんだけど」

僕には哲也に尋ねられるような事は身に覚えが無いハズだ。
しかし、何故か多少気になった

「ねえ…」

うるさい

今は起きたくないんだ

「冷蔵庫開けたときに中に入ってたあれは…なんなの？」

……？

何を言っている

「中のアレは一体…」

バレた

しまった

迂闊だった。哲也は前にこのアパートの場所を知っていたのを忘れ

ていたのだ

おそらく酒で泥酔している僕を家に運んでくれたのだ
おそらく、冷蔵庫の藤谷を発見したのは僕に水でも飲ませようとして扉を開けてしまった時に目に入ってしまったのだろう

意識が急激に覚醒し跳ね起きる

そして、哲也に向かって静かな声で尋ねた

「見たのか？」

生来人見知りする性分である僕自身の声とはとても思えない氷のよ
うに冷えきった声が出る

「あれを見たのか。哲也」

再度確認をする

自分の聞き違いであつてほしいと半ばそう願いながらも胸中は諦め
に満ちており、心は嵐の前の大海の如く穏やかだった

「あれ、、人の首だろ？一体何があつたんだ兄さん」

こんなに狼狽して落ち着きを見せない哲也を目にしたのは初めての
経験だった

「兄さん。まさか人を「あれは僕が悪いんじゃない！」

哲也の言葉を遮って、蘇ってきた胸中のどす黒い感情が口を割って

溢れ出す

「あれは僕が悪いんじゃない。あいつが、藤谷が悪いんだ。あいつは山城と組んで僕を馬鹿にしただけでは飽きたらず、職場で雌豚と一緒に僕を笑いのネタにしたんだ
あれは当然の報いであり結果だ」

「そんな、何で人を、ありえない。そんな身勝手に「あいつは死んで当然の奴だ。僕がやらなくても何時かは誰かに恨みを晴らされていた。」

仕方がなかったんだよ」

「そんな理由で人を殺すなんて間違ってる！」

「僕はお前とは違う！」

哲也と僕の価値観の相違に対してのイライラが頂点に達して叫ぶ

「お前は解らないだろうな。人から愛され、尊敬されるお前に僕の気持ちなんて理解出来ない」

今まで溜まってきた思いが

「僕は顔が醜いとか少し勉強が出来ないとかそんな自分勝手な理由で母さんに虐待されてきた。

苦痛でしかなかった高校をようやく卒業して社会に出てようやく自分の足で立つたと思ったら、今度はバイトの連中に馬鹿にされる。自分を変えたいと思ってこっちが接してきてるのに奴らはそんな僕を無視し、嘲り、陰口を叩き、自分に見合ったお仲間と一緒に笑う
哲也、お前はこれ程の屈辱と敗北感を味わった事があるか？

いや、無いよなあ

お前は生まれてこの方、母さんだけじゃなくてそこら辺の馬鹿共にすら玉の輿の様に持ち上げられてきたんだよなあ
なにもしていない、ただ普通に他人と接してるだけでさ」

長年に渡って降り積もってきた憎悪を哲也にぶつける

「……………違う。俺は」

「いんや。違わない

見てみるこの僕とお前の差を、同じ父親と母親からの腹の中から生まれてきたのにこの差は何だ？

可笑しいだろう？笑えるだろう？

何せ生まれも育ちも一緒だった僕らは何でこんなに差が付く？

お前はただそこにいるだけで友人が出来た

僕は人に好かれようと努力したのにこの様だ。笑え

おまけにお前はいつだって無条件に母さんに誉められるのに僕は何をしても殴られる

生まれた時の条件が変わらないはずの僕とお前で何でここまで差が出来る

可笑しい、どう考えても理不尽だ

こんな不条理があつて良いはずがないッ！

今まで虐げられてきた僕の思いがお前には解るか？哲也」

藤谷を刺した時以上の興奮が僕の中で湧き上がってくる

それともこれは生まれてこの方ずっと僕より優位に立っていた哲也の沈黙を良いことに反論を許さずに一方的に罵倒している事に対する高揚感から来るのだろうか？

しかし、哲也は動揺していた先程とは異なる瞳に広大な湖を連想させる静かな目で僕を見つめつつ言った

「兄さん」

静かに言う

僕は興奮していた

これまで自分と比較して優秀な弟に対する不満や憎悪をここまで表面に面と向かって出したことはなかった

自分が罵倒で哲也を詰るのを楽しんでいた

当然だ

今まで僕は敗者であり哲也は圧倒的に勝者であり続けた

そして今、様々な要因が絡み合った結果として革命が起こり僕の気迫は哲也を凌いでいた

哲也は僕に脅えていたのだ

僕が行った罪に対して

脅えていたから露出した僕の憎悪に反論出来なかった

僕は今、どんな事が有っても今だけは哲也より上だった

昨日微かに感じた藤谷への罪悪感などとうの昔に脳内から消し飛ん

で粉々になっていた

だから、この攻勢を出来るだけ継続させる

この時だけでも僕が哲也を敗者に

様々な成功を収めた哲也を抑えるためたったそれだけの為に

次に哲也が何を言っても僕自身が味わってきた負の条理で論破する
つもりだった

しかし

「自首しよう」

たった一言だけのその言葉で

僕は再び現実に取り戻され、

敗者になった

「え？今なんて…」

哲也は再び言葉を噛みしめるように言った

「警察に行こう。兄さん

今ならきつと、マトモに戻る」

次の瞬間、僕の表情が乾いた

笑う

笑う

笑う

笑う

laugh

乾笑

「あは、は、な、、な、何を言っているんだ？
て、哲也」

哲也はじつと僕を見つめる

それは今まで僕が誰からも向けられたことのない

人から受ける真摯かつ暖かな態度だった

「今の兄さんは少しおかしいよ、いったいどうしたんだ？

なんでこんなになってしまったんだ？

昔の頃の不器用だけど優しかった兄さん何処に行ってしまったんだ
よ…」

.....あ。

今の言葉が引き金になって思い出した

話し相手がいなかった時の僕は家で母さんも居ない、塾の休みの時は哲也とたまに喋っていた

お互いの先生の事、いっしょにみたヒーロー番組の事、こっそり食べたチョコレートが美味しかった事

何故だろう？

すっかり忘れていた

目の前が辛くて痛くて冷たくて苦しかった時

この事を思い出して空想に浸っていたんだっけ

次に哲也と話せる話題を考えながら

僕はこれ pensando 辛いことから痛む心を和らげていた

だから耐えることが出来た

自殺するのは哲也と話せることが出来なくなるからやめた

最近は何々ひどい目にあっていたからすっかり忘れていたけど

こいつはそのことを忘却せずに覚えていてくれたんだ

そういえば哲也は昔から優しい子だった

ランドセルが棄てられた時に、母さんに殴られていた僕を母さんを止めて助けてくれたこともある

その外に色々と僕の知らない所で庇って居てくれたんだろう
あの事件以来母さんに殴られる回数が減っていた気がする

僕は自分と違って母さんに愛されていた哲也を、

憎かった哲也を殺そうとしていたのに

そうか、だからあいつは

妬むことしか知らなかった僕と違って

人に好かれているんだ

「ごめん、哲也。」

僕はどうかしてたよ」

「兄さん……」

「はは…笑えよ。」

兄ちゃん駄目人間過ぎて、ついカツとなって人殺しまでやっちゃまったよ

落ちるとこまで落ちたけど、今からでも立ち直れるかな」

哲也は目に涙を浮かべて何度も頷く

「うん……うん、

きつと出来るよ兄さん

人間は何度でもやり直せるさ

わかってくれてありがとう、、、

昔の優しい兄さんに戻ってくれて、、、

本当に……良かった」

哲也はぼろぼろ涙を流している

僕も釣られるようにして泣いた

「ありがとう哲也

僕はやり直したい。

妬むだけの人生から哲也みたいに人に愛される人に生まれ変わるよだから――

僕を警察署まで送ってくれないか？

自首する、

いや、今までの人生を清算してやり直すために」

「でも……兄さん。本当にいいのかいしばらく会えなくなるよ」

僕は苦笑した

ぼんぼんと優しく励ますように哲也の肩を叩いてやる

「おいおい。

先に言ったのはお前だろう？

大丈夫さ、刑務所の臭い飯だって、慣れれてしまえば今日のレストランで食ったディナー並みに美味く感じるって」

「…わかった。俺にも協力させてよ

兄さんの厚生、もとい生まれ変わりにさ」

それから僕たちは哲也の車に乗り、警察署へと向かった

深夜の夜景は今もまた綺麗に建物の明かりを映えさせ、今は夏ではあるがまるで冬のクリスマスツリーのように街を美しく彩っていた

そこで僕は哲也に頼んだ

「すまない、哲也。少しお願いがあるんだ」

「何？」

「近くにあの公園が有るだろ？ 待ち合わせ場所の彼処が」
「なんで？」

「最後にお前ともう少しだけ話したいんだ。

そう…昔のようにさ」

「ああ。わかった」

哲也は公園前着くとに車を停めた

「ありがとう哲也」

「……………え？」

そして僕は

車が完全に停車したと同時に

運転席に座った哲也の首筋にあの果物ナイフを突き立てていた

「なんで、ゝ、ゝ」

哲也は驚きで目を見開くと同時に僕の座る後部座席を振り向こうと
僅かに首を捻らせ

「にい……………さ……………」
「」

果物ナイフの絵と全く同じ毒々しい血潮を、

首の動脈からピューツと効果音が出そうなほど赤い噴水を勢い良く
噴き出しながら

僕に向けかけた視線をあらぬ方向に向けたまま

哲也は死んだ

十一話（後書き）

すみません

最終回というのは嘘です（汗

実はもう少し続きます

最後までよろしくお願いしますm（　　）m

評価、感想等ございましたら是非ともお送り下さい

評価は無くとも結構ですので

筆力向上の為に！

十二話

僕は震えていた

それは哲也の首筋にナイフを刺した時の感触を思い出し、今更嫌悪感に陥った訳でも、今から行くことに罪を感じ恐れおののいているわけでもなかった

シャツはバケツ一杯の水をぶちまけられた様に汗だくになり、手足は熱病に魘されたかのように震えていた

だが、それは決して罪悪感からくる自責の念ではない

僕を震わせているのはただの作業に対する疲れからだ

では、何故僕は哲也を殺したか？

僕はあいつの説得を今更聞き入れることが出来なかった

確かに哲也の説得には僕の心に迫る気迫があった

しかし哲也は

あの時、僕は哲也の為に自殺をしなかったのも、確かに真実の一端

なのかもしれない

だけど僕はあの時自分が死ぬのが怖い以前に

“僕を裏切った三人組を僕と同じ目に遭わせてやりたかった”のだ

哲也はそこを勘違いしてしまった

哲也亡き今に、こんな事を考えても思考の無駄かも知れないが、正直にあいつが人に好かれる原因がようやく理解出来た

あいつは自分の事しか考えない僕と違って心の底から他人の為に本気で泣くことのできる人間だ

否、哲也が死んだ今現在はそうだったと過去形で言うべきなのか？

結局の所あいつは最後まで僕という存在を理解出来なかった

僕が何故この世界を怨んでいるかが

それは周りに居る連中が手を差し伸べ助けてくれる哲也と違い僕は差し伸べられる手すらも用意されていなかった事に尽きる

あいつは人当たりが良い上に僕と違って本当に良い友人に恵まれ、支えられたのだろう

だからこそあそこまで裏表の無い、真っ直ぐな人間な成長する事が出来た

一方の僕はと言うと狡く、賢く、それでいて臆病な連中にずっと利用され続けてきたのだ、加えてあの母親だ。お陰様で、元々人見知りだった僕の人間嫌いはますます強くなる傾向になった

近寄ってくる連中は信用することが出来ないまま遙か昔に心の扉に鍵を掛けてしまった為に、喜びを分かち合い、悲しみを分割し支えてくれる友人も出来ず

自分で言うのも変な気分なのだが
結果として自己の存在が大事なだけの醜悪な人格に形成されてしまったらしい

だから先ほど僕は哲也の涙に僅かに心を揺るがされる一方で、それ以上にドス黒く、醜い嫉妬の感情が重油の噴き出す油田の様に湧き上がって来たのを実感していたのはその時の事だった

その僕が封じ込めていた黒いバケモノは僕に命じた

“ 哲也ハ才前ト相反スル存在ダ、壊セ、壊セ、アイツヲ認メテシマ
エバ才前ノ二十五年間ハ無駄にナツテシマウ

才前自身ノバグヲ取り除ケ。今更才前ハ変ワル事ナド出来ハシナイ
ナラバ壊セバイイ

氣二入ラヌモノ、才前ノ存在ヲ脅カスモノ否定スルモノ全ヲ消シテ
シマエ。ソウスレバ才前ヲ否定スルモノハ居ナクナル
今更何ヲ脅エテイル？

藤谷ヲヤツタトキハ躊躇イハナカッタ筈ダ
哲也ヲ殺セ

アイツハ才前カラ母親ノ愛情ヲ奪ツタニツクキテナノダ
ナラバ才前ハ代ワリニアイツノ命ヲ奪ツテシマエ
コレハ正当ナル報復ナノダカラ”

違う

バケモノなんかじゃない

あれは紛れもない僕自身の感情だった

心の奥底に地層の様に何年かけて堆積した醜い心の污泥が、世界へ
の憎しみが、世の中への不満が哲也の真っ直ぐな説得を受けて生じ
た夜よりも暗い色をした深遠の闇が僕を哲也殺害へと駆り立てたのだ

多分、本当の動機はそれなのかもしれない

皮肉としか言いようがないのだが、事実として僕は哲也の説得によつて『変わつて』しまつたのだ

ただ皮肉な事にその変貌は哲也本人の望んだ更正ではなく、僕自身の更なる墮落を招いたと言つのは哲也本人にとつて残酷な運命というより他ならない結果に終わつてしまつたとは

だが、次の瞬間に僕の胸を満たしたものは喜びの感情ではなかつた哲也と一緒に実家で過ごした二十年近くの時、たまに掛かつてくる電話、そして先刻の最後の晩餐

もしかしたら僕は自分で殺したくせに哲也の死を悼んでいるのかも
しれない

全く持つて都合の良いことだと自分自身を自嘲する

僕はそれらの思いをを肺が一杯になるまで味わう様に深く息を吸い込んだ後、呼気と共に切り捨てさつたと『後始末』の作業に移つた

後部座席に寝かせた哲也のポケットから車のキーを抜き取る
それでエンジンをかけ自分のマンションに戻るため哲也の車を始動
させた

これから逃げなければならない

流石にこの街で短期間に二人も行方不明者が出たとなれば警察も事件として扱わざるを得ないだろう

ましてや藤谷に関しては僕は動機を持っている

そして藤谷と僕は同じマンションに住んでいた。警察が関連性を見つけ部屋の中を探し回れるかも解らない。

そこで僕は“証拠を消す”

藤谷と哲也の死体を近くの山に捨てにいくのだ

とりあえず僕の部屋から証拠が出なければいくら怪しくてもすぐには検挙出来ない

警察もそうそう暇では無いだろうから、適度な頃合いを見計らって遠くへ逃げればいい

いや、警察はもう動いてるのかもしれない

なるべく行動は早めにやるのがベストだ

そして僕は教習所以来の久しぶりとなるドライブに実践した

マンションに到着した

マンションまでの道のりは哲也と警察署に向かう際に記憶していたのだ

誤算だったのは哲也の車がマニュアル操作で作動する事とすっかり覚めたとは言え僅かに体内に残留したアルコールの影響だった

クラッチの仕組みは理解していたものの、僕はオートマの車しか運転した事が無かったので道中何回もエンストを起こしそうになり、そのたび背中をいやな汗が伝った

そして酒の弱い僕がアルコールをかなり飲んでいたとは言え、哲也が藤谷の死体を発見した直後から意識が完全に覚醒しきっていた為に、運転に支障が出ないレベルで足が僅かに震えていただけであった。

とは言えアクセル操作の微調整に少々苦勞したのだが

ストレスと肉体的疲労のお陰でシャツはずぶ濡れといってもいいほど湿気を帯びており、塩分の混ざった水分によってウェイトと臭いがプラスされた分、気持ち悪さも増加した

そうだ。まずはシャワーを浴びよう

汗と臭さでベトベトになったシャツを脱ぎ捨てたらさぞかし気持ちがいだらうし、死体を棄てる作業もスムーズに出来るはずだ

ついでにベトベトのシャツも棄てればいい

哲也の血が僅かに付着しているから証拠品にもなりうる

それにこんな血と汗で汚くなったシャツはもう要らない

無駄に数だけは揃えている安価で安いものなのだから

いけない、どうやら思考が混乱しているらしい

さっきからどうでもいいシャツの事ばかり考えてしまう

頭がこんがらがってる証拠だ

まずは冷たいシャワーでも浴びてやるべき事を少し頭の中で整理しよう

死体の処理はそれからだ

僕は階段を上り終わり自分の部屋の前まで来てそこで気付いた

—— ドアが半開きになり、微かに部屋の明かりが漏れている

「まさか」

焦りは言葉となり表れた

そつ。さっき哲也をなんとか部屋の外から出して殺す機会を窺って

居たのだが

そのことに頭が一杯になりすぎてドアの後始末さえも気が回らなかつたようだ

誰がいるかも知れない

僕は不信に思われないように自然になるべく差し足忍び足で足音を忍ばせてそつとドアノブに触れ音が出ないよう神経をすり減らしながら辛うじて確認出来る程度にドアの隙間を広げ

微かに目を見開いた

他人の声が明らかに僕の部屋から聞こえてきたのだ

「……………な、な、なんだよ……これは」

それを見、声には出さずに心の中だけで驚愕する

僕の部屋で冷蔵庫から放られた生首を見つめ震えていたのは首になつたバイトと一緒に勤め、

僕が何回も何回も殺意を抱いていた山城だった

山城は変わり果てた藤谷を見てすっかり錯乱しているらしく茫然自失の体を擁していた

そこで僕はなにを思うまでもなく自然と思った

死体発見の口封じをする機会は今しかない
と

僕は足音を立てないように靴を脱ぎ靴下も脱ぎ素足を露出させたあとそつとドアを開けた中に忍んだ

山城はまだ気付いていない

擦り足で右手をポケットに突っ込みグリップの感触を握り締めながら奴に忍び寄る

山城はまだ痴呆にかかったように惚けている

幸いにして玄関の見える位置は冷蔵庫側からは死角になっているため山城に勘ずかれずに近付けそうだ

僕の位置から山城だと確認出来たのはひとえにあいつの着ている赤い服で判別がついた。ただそれだけのことだった

前に山城はバイト先で真っ赤なアロハシャツを着て勤めた事が過去にあった

その時はバイト先を遊び場だと思っていたのかとあいつに対して憤慨の意を抱いたものだがまさかこんな下らないことで山城だと解つてしまうとは

山城まで残り半メートル位になったところで間抜けな山城がようやく僕に気付いた

気付かれると僕は直ぐに山城に接近し右手に持った赤い果物ナイフを横風ぎに一閃させる

「ひっ！」

山城は腕力だけでとっさに身を左にに擦らせただけの回避に僕の一撃を避けたことによつて右頬を僅かに切り裂く結果だけに止まった

山城は信じられないといった風に右手で傷口を押さえ、そこに付着した血を眺めてようやく自分が殺されかけている事実を理解したようだった

「ふ、ふ、ふじ、藤谷はなんでこうなってるんだ？」

もしかして、お、お前がこれをやったのか？」

僕が答える必要は全くなかったので今度は刃先を山城に向け前方に真っ直ぐに突き出す

銀色に輝く刃は山城の胸に深く突き立った

山城が口から血を吐き出しながら倒れる

ごぼり、ごぼりと音をたてながら血まみれに濡れた唇から赤黒い血を吐き出しながら山城がなにか言っている

半泣きになりながらも必死に何かを訴えている目の表情から察するにあいつは恐らく自分を殺そうとしている僕に対して命乞いをしているのだ

僕は山城の生殺与奪を握っている事に僅かながらの興奮を覚えながらも、山城の胸から引き抜いたナイフを今度は山城の喉に一文字を描くようにしてに切り裂く

山城の喉は第二の口のように赤い切り口を晒しながらぱっくりと開き、口よりも大量の血を吐き出してから

そのまま仰向けに崩れ落ち、永久に黙した死体と化した

山城との決着はひどく呆気なく感じた

山城がここにいた目的は恐らく藤谷と連絡が着かなくなったから心配で主が居ない部屋に来ていたのだろう

僕の部屋にいたのは恐らく好奇心から

性根の腐っている山城は僕に対する嫌がらせを思いつき冷蔵庫の中を漁るなり、藤谷と同様に部屋の物を破壊していたのだろうか？

そこで思わず変わり果てたお友達と再開してしまい呆然としていたところに僕に殺されてしまったのだ

終わってみれば外面が良いだけのひたすら運が無い馬鹿で間拔けなだけの奴だったかもしれない

バイト先で散々虐められた際に何度も殺してやりたいと思った事だろう

そのための目的で先刻に山城の命を奪ったこの果物ナイフも買った
ようやく山城との因縁に決着が着いた訳だ

このナイフは山城の血に染まった事によりようやく目的を達成したともいえる

最初は山城を刺すつもりで購入した粗末なナイフが色々あって二人の命を奪い最後に元々僕が刺すつもりだった山城の命運を絶ったのはある意味運命とも言えた

今考えると、多少値が張ってももう少し立派なナイフを手に入れるべきだったとも思う

たかが果物ナイフの癖に折れずにここまで酷使してよく持ったものだ。赤黒く染まった銀色の刃は多少曲がっているとは言え、使用するにはまだまだ問題は無いように見える

どうやらあまり物に執着しないばかりでもこのナイフだけでは僅かながら愛着が芽生えてしまったらしい

もう使う機会はないと思うがしばらくは持っていて良いと思いそばに落ちていたティッシュで付着した血を拭き取った

人間の油が付着した生々しい銀色の刃は僕の執念が取り憑いたかの
如く電灯の光を反射して怪しく鈍い光沢を放っていた

十三話（前書き）

もう少して物語は終わります
出来れば読了後に感想だけでも良いので下さい。マジに

十三話

僕は山城を殺した後にすぐシャワーを浴び、汗にまみれたシャツや衣服を着替えた

そして、哲也の車にバラバラになった藤谷、物言わなくなった山城を哲也と一緒に後部座席に寝かせた状態で乗せ、直ぐに車を発進させた

家を出た時、車のデジタル時計を見ると時刻は午前三時を回っていた
死体を隠すには絶好の時間帯だ

この時刻に外を出歩く人間は少ないだろうし、夜勤でパトロールを行っている警察官もこの寂れた街にはここから東に十キロ離れた場所にぽつんと一つ小さな駐在所が存在するだけである

リスクは多少存在するが、僕が職質に遭遇する心配もそれほど必要ないだろう

それにこれは哲也のスポーツカーだ。ある程度は速度は出せる自信はある

それに捕まりそうになったらスピードを上げて逃げればいい

ここ数時間で運転もかなり慣れてきたので、逃亡を計るのも難しくは無い問題だろう

それ以前に、ピカピカと分かり易い赤いパトライトを光らせて接近するパトカーなどには警戒するまでもなく捕まる筈も無いだろうが

一時間程走った先には山が見える

そのままもうしばらく走らせると新緑の木々が深く繁る山道に入った

この辺りの道路は昔に敷かれて以来長らく整備が行われておらず、長い年月の間に風雨に晒され、凹凸状になったアスファルトを踏破しているタイヤから伝わるの振動で車全体が震えながら走っていた

僕のハンドルを握る手汗でびしょびしょになり震えている

それは自分が殺した人物の死体をまるでゴミが何かの不当投棄のように山に棄てるという背徳行為を行うことに対する恐れなどではあり得ないし、死体という名の重荷を捨て去ることによる解放感による震えでも無かった

痒い

ここしばらく感じていなかった右手の痒みが、

とつくの昔に収まったと思っていた筈の原因不明の蕁麻疹が再び蘇って痒みをもたらしている

それも前に起きた今までまでの只の“痒み”の範疇に収まりきれるものでは決して有り得なかった

その痒みは『かゆい』と言うよりひどく『熱い』と感じるのだ

熱さと寒さは人間が感じる事の出来る限界を超えればどれも“痛く”感じるのだということを過去に何かの健康番組で見ていた気がするが、よく思い出せなかった

只、言葉として変換できる右手が蝕まれている痒みを明確に示すとするればそんな感じだった

今は運転に支障を来すために必死で我慢をしているものの、平常時なら僕は間違いなく腕の痛みに耐えきれずに呻き声を上げていたであろう痛感。

必死にハンドルを握り締めて、更に痛みから目を剃らすために闇を照らすライトの光を自分の視線で必死に追いつける

出来る事ならば停車し、ハンドル操作で酷使している片手を思う存分休ませたかった

しかし、自転車と違い大質量の車を運転中にハンドルを片手で制御するのは難しい、それにこの視界の悪い山道だ

長年車を運転している人間は携帯を操作しながら片手運転が出来るのだろうが、少しは馴れたとは言え経験上運転初心者である僕は流石にそれを実行する気にはなれない

痛みを黙殺してまで運転を続けた車は、一時間程走った後に、比較的開けた場所に到着した

直感的に車を止め、その茂みを掻き分けしばらく十五分程歩いた

先は切り立った急な崖になっていた

その地形を利用死体を棄てるかどうかしばし悩む

結論はここで処分する事に決めた

穴を掘って埋めるのも確実に死体の発見を防ぐ一つの有効な手段で発見されにくい時間がかり、手間が掛かる

それに五メートル以上の深さを持った穴じゃなければ、山の動物が登山者に掘り起こされる可能性がある

それに僕が下手人とはいえこれ以上山城や哲也の死体と一緒に過ごすのは耐えられなかった

だから面倒くさい事はさっさと終わらせて楽な気分になるに限る

哲也殺害から此処にくるまでに僕が考えたよりも動揺せず比較的冷静に物事を処理することが出来た自分に対して多少驚く

自分一人で三日間に三人も殺したという異常な状況に身を起きながらも感覚が狂っているとしたか考えないくらい今日の僕は頭が冴えて思考がクリアになっていた

狂気に侵されているならそれでも良い

どの道この先逃げながら生きていくしかないのだ

人殺しまでやって肉親にまで手を掛けてしまった今では全てがなにもかもどうでも良かった

これからも気に食わない連中や僕自身き危害を加えるような輩がいれば今回のように証拠を遺さないようにして消してしまえばいい

今更外道の道を歩もうとも後悔は全く無かった

自嘲する

ネガティブな僕が多少、歪な形であるとは言え自分を肯定しているとは

こんな事は今までの人生でも考えなかった

ふと車内に表示されたデジタル洋数字が目に入る

家を出た時から既に三時間が経過していた

深く物思いに耽りすぎて時間を無駄にしてしまったようだ

雑事は早く済ませたい

そう思い道を急いだ

僕は車で来られるところまで崖に近付きそこから先は自分で死体を担いで歩く事にした

後部座席を見、なんとなく視界に入ったいくつもの藤谷の入った黒いゴミ袋の内一つを手取る

これならコンパクトで持ち運びがし易い上に崖に死体を捨てる実験

をするにしても恐らく上々の結果が得られるだろう

それを持ち崖までやってきた僕はゴミ袋の中の更に小分けした袋から藤谷の腕が収まった袋を実験も兼ねて崖の暗闇に放り投げた

死体を包んだビニールでは所々でゴツゴツした岩に激突し、袋は徐々に破け、そのすきまから血や、何か白いものを撒き散らし闇に落ちながらやがて見えなくなった

初の死体処分としては上々の仕上がりだった

この位の崖なら遺体は粉碎され、証拠は散逸する

後は森の動物が後始末をしてくれるだろう

猪や土竜はなんでも食べる雑食動物だ

普段食べない人間の肉とはいえ、動物は食い物の選り好みはしない筈である

少しの食べ残しも残らず食い尽くしてくれるだろう

そうなれば後は時間がカタをつけてくれる

生前散々人や僕に迷惑をかけた藤谷や山城は自ら猪のフンとなり、その後は肥料と化して自然を肥やす

実に環境に優しい理想的なりサイクルである

ふと日本の死刑罰の一つに生き埋めというのを提案したいと思った

他人に迷惑を掛けるクズ人間は首だけを地上に露出させ、餓死するまで苦しみを味わう

その後の遺体は勿論埋葬なんかされずに山や海に投棄され自然に還元するのだ

それを我ながら良いアイデアだと絶賛する

しかし、その刑が正式採用されるとなると、最初に刑が執行される人間は間違いなく僕自身だろう

自分で考えた死刑で死ぬのはあまりにも間抜けが過ぎないから、投書を国会に提案するのはやめる

残念だった。帰ったら半分本気でやろうと思ったのだが

ブラックジョークを考えるのはこの位にして残った藤谷の体のパーツを崖に放った

次は山城を棄てる

そう決めた僕は哲也の車へと急いだ

この森はちょっとした樹海だった

植物の育ちが良いのだろうか普通の森に比べ木々が太く、それに生えた葉も人間の掌より大きい
更に雑草とかの名もない植物の数も他の森とは比較にすらならなか

った

死体を棄てる以上、人があまり訪れなさそうな人里を離れた僕が住む街の郊外から離れた場所を選んだつもりだが適当に判断したのが帰ってよい結果になるとは思いついたのだが

ただし最低限の警戒も必要だ

これだけ深く暗い森で迷えば、ほぼ間違いなく高い確率で帰れなくなる

死体を処分しに来たのに自分がのたれ死んでしまつては意味がないし笑えない

だから僕は車の車内灯とライトを付けたままで先ほど崖まで行ったのだ

これならば車の光で帰るべき場所が解るし迷わないというわけだ
実際に僕は今その灯りに向かつて歩いている

やっぱりなにせよ保険はかけとくものだ

だが、そこで哲也の車に起きた異変に気付いてしまった

『車の中に誰か居る』

だが目を凝らして再度車内を見てみると確かに動く人影らしきものは確認出来た

背中を冷たい汗が伝ってズボンに染み込んでいくのを感じた

ドクン

ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンド

クドクドクドクドクドクドクドクドクドクドクドクドク
クドクドクドクドクドクドクドクドクドクドクドクドク
シシシシシシシシシシシシシシシシシシシシシシ
シシシシシシシシシシシシシシシシシシシシシシ
――――

心臓が別の生き物のように早鐘を打つ

一筋だけの筈の汗が次々とダラダラ流れ出す

焦りが現実的に有り得ない想像をする

死体が生き返った？

藤谷か山城が僕に復讐するために蘇った？

判らない

何故ここに僕以外の生きている人間が居るなんて

殺した相手に復讐されるなんてシナリオは演出ばかりに懲りすぎた
趣向にある最近のホラー映画ではベタすぎて使われないだろう

冗談じゃない

意味が解らない

ここに人が居るなんて

登山者か？

いや、真夜中なだけで嵐でも来てないのに他人の車で寝泊まりする
阿呆やホームレスなんて聞いたことがない
そんな奴はこんなに森が深い山にはいない

では山の動物だろうか？

有り得ない

車には電子ロックが架かっている

道具を扱えない動物なんかじゃ無理だ

それに、あの陰は間違いなく人間のシルエットだった

何故だかそう確信できる

直感とかそういったものかもしれない

それにあの陰は、、

理由は判らないが前にどこかで見たことのあるような人物かも知れない
ないと考えがチラリと脳裏をよぎってしまったからだ
そして、唐突に何の前触れもなく

その“誰か”がこっちを向いた

息を飲む

僕は“その人”を知っていた

その人と僕の目があった

その人はこの世全ての悪を見るような、人類の憎しみを全て請け負ったような半ば死線とも呼べる視線を僕に突き刺してきた

そしてその人物は車の中から“何か”を抱きつつ唇を動かした

……信二……！

確かに僕にはそう言ったように聴こえる

いや、事実そう言葉を発したのだろう

なぜならそれは、その人物は……

「信二…信二……シンジ…シンジイイイイイイイイイイイ
イイイツ……！」

見間違えようのない僕の母親だったからだ

母さんは変わり果てていた

昔のようにきめが細かった肌は頬の骨が露出したかのように深く痩せ、絹のように滑らかだった黒髪は縮れてボサボサになり眼下は黒い隈が出来ドクロの様な印象を抱かせ、その奥には憎しみと怨み

で濡れた瞳が昔以上に狂的で残忍な光りを湛えていた

「お前、お前がお前がお前がッ！哲也を殺したのかいッ！」

それはもはや質問ではなく僕がやったという断定だった

まともに母さんとの意志の疎通は図れそうに無かったが、僕は素直に答えた

「そうだ。僕がやったさ。僕が哲也を殺したんだ」

母さんはそれに対して顔だけを僕に向けながら車を降りていた
その右手に錆び付いた包丁を持って

身の危険を感じた僕は直ぐに交代しポケットからナイフを取り出す

「シンジイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
ッ！」

駆けてくる

母親が

実の息子である僕を殺すために

十三話（後書き）

風邪気味かな？

なんか自分の周りがグルグル回っている気がするんだけどね。

明日スパロボ届くで部屋に籠もってやろうと思ってるのに、なんでこんなに間が悪いんだろうか？

とゴジラVSデストロイア見ながら書いてみる

熱で自分の体もメルトダウン

最終話（前書き）

ようやく終わります

前書きウゼエ。と思った方は本編に進んで結構です

PCで見ている方はなるべく部屋を明るく、ケータイで見ている方は光源下にて、外で閲覧している方はそのままでも目も疲れに十分注意して読んで下さい

ベッドの上で寝転がりながら小説を読んだり、電灯が全く付いてない部屋でのケータイいじりは私のように目を悪くしますので

あと今回は結構長いです

更新に随分と遅れて申し訳ありませんでした

最終話

錆びた包丁を片手に握り締めた母さんは僕の方へ向かって駆けてくる

僕を殺すために

暗闇の中で母さんの目が見えた

その目は獣のように貪欲で獲物を仕留める為には手段を全く選ばない狩人の光を宿している

迫ってくるヒトの影が獣の眼光を湛え、その視線は僕を捉えて放さない

鋭い眼光を受けた体は金縛りに遭ったかのようにピクリとも動けなかった

僕は完全に母さんの気迫に圧倒され、瞬き以外は何もできなかった
しかし、刃が体に接触する寸前に渾身の氣力を振り絞り凶刃から僅かに身を擦らせることだけはかるうじて許された

僕に向かって突き出される刺突を本能的に前に突き出した果物ナイフで防ぎ弾いたが、勢いを完全に殺すことは叶わず、頭部を狙っていた凶刃は僅かに逸れ、ざくりと僕の頬を深く抉った

そこから少くない量の血がダラリと垂れ、今の一撃が嘘でも冗談でも無く、本気で僕の命を奪う為の一撃だった事をようやく理解した

理解不能

何故？母さんがこんな山奥に居るのか

なんで？母さんが車のドアを開けられたか

疾走している間に頭の中で浮上する疑問を全て遮断し、余計な酸素を食い潰す脳の働きをシャットアウト、そして大気中から取り入れた酸素全てを逃亡の為に注ぎこむ

しかし、僕の逃亡劇もそこまでだった

「……………ッ！」地面を這う樹木の巨根に疲労でふらついた足が躓いてしまったのだ

気の幹を支えにして急いで立ち上がるうとする、が

それは左脹ら脛に包丁を突き立てた母さんによって阻止された

急な鋭い痛みに蝕まれた僕は包丁が刺さりっぱなしの足を押さえて呻いた

「う……………あああ……………」

本当はもっと大きな声で叫んで痛みを和らげなかった

しかし、足の反対側までに貫通する程、包丁で差し貫かれた傷を蝕む激痛は、喉の機能まで麻痺させてしまったかのように細かい呻き声を挙げさせる事しか出来なかった

「！」

そして、いきなり包丁が刺さった脹ら脛を鷺掴みにされる

その手に鷺掴みにされ足の動きを封じられた後、ぐりぐりと無造作かつ乱暴に僕の足から包丁が引き抜かれた

あまりの激痛に喉の麻痺すら忘れ自分の口から出たとは思えないくらい大きな悲鳴を挙げる

「うっ！うぎゃああああああああああああああああああああああッ！！！！！！！！」

先程と比べものにならない激痛に書き換えられ、僕の口から痛みが苦悶の叫びへと変換され、外界にと解き放たれた

先程まで深々と包丁が刺さっていた傷口から先刻に頬を切りつけられた時以上に多くの血を流れている

痛み悶え体を足を押さえて出血を止めようとしている内に視界に母さんが入った

木製の柄まで血に染まった包丁を握ったその人はやっぱり僕を追ってきた母さんだった

母さん僕を見下ろし皺だらけの顔を歪めて楽しそうに笑っていた

そしてそれは昔、僕をいたぶる前にも見せたあの笑顔にそっくりだった

「信二。お前は本当にいけない子だね」

昔の綺麗な声とは程遠い年老いたかすれ声が聞こえる

「お前は産まれた時から存在そのもの間違っていた。父さんの血を受け継ぎながら容姿は醜くて、知恵も回らないし、人付き合い要領も悪い上に、あなたの周りにはだーれも友達なんて居なかった

絵に描いたような頭の悪い馬鹿だね」

やせ細った身を震わせゲラゲラとさぞかし可笑しそうに母さんは僕を嘲笑う

そして、母さんの目に一瞬だけ昔を懐かしむかのような光がよぎるのを感じた

「その点、哲也は優秀だった。いつも人の中心に居て、指導力も頭も優秀だったけど、父さんみたいに優しくなかったね」

夜の空を見上げ、独り老いたの老婆が独白する

父さん。僕の父親を指す単語を母さん自身が発音した時、彼女は昔の父さんが出て行く前にそうだった僕を殴らない本当に優しくかった母さんだった頃の輝きが宿った

それは瞬きの間にも満たない、ほんの一瞬の事だった

そして母さんの顔が僕の方を向いた瞬間

その眼は

再び一瞬にして

狂気を宿していた

「そんな母さんの生きがいを信二。

出来損ないのお前が奪ったのよ

私の哲也を。父さんに瓜二つだった哲也を「最早母さんからは理性の匂いを嗅ぎとれない事を突き刺さるような痛みの中で悟る

「許さない…絶対にお前を殺す

楽には殺さないわ

一週間かけて小指の先から切り飛ばして散々痛みと苦しみを体に刻み込んでから殺してやる

勿論さつき刺した足は消毒してあげる

変な破傷風で死なれたら私が殺せないしねえ」

ヤバイ

僕は痛む足を無理やり立たせ、なんとか母さんに向き直ろうと試みる、しかし

逃げようとする僕を母さん歪んだ笑みともに蹴り飛ばした

僕は激みと共に転倒し、再び地面とキスをするハメになった

また起き上がろうと試みるも先程刺された腿を爪先で抉るようにして蹴られた

「楽には殺さないよ。信二」

母さんは無様な醜態を晒す僕を見物し、皺だらけの乾いた唇を歪に曲げ、涎を垂らしながらニタニタと笑っている

その時恐怖を覚えた

母さんが

本当に僕を殺すことを楽しんでいる母さんが

人間とは違う、何か別の生き物の様に思えた

「あ、ああああッ……………」

僕は殺意に満ちた母さんの濁った目を見て恐怖に支配され、痛みを押さえながら無様に土下座の体勢を取り見てこう言った

「ご…ごめんなさいっ。哲也を殺した事は謝る。自首もする、だから

許し…て下さい……………」

か細い声だったせいも気付かなかったのか、それとも命乞いをする僕の姿がそんなに醜かったのか、母さんは僕を見て何も答えずに、愉快そうにゲラゲラと笑うだけだった

解ってはいた

あの笑い方をする時の母さんには何を言っても通じないことは

仮に哲也を殺したことを抜きにしても今の状態の母さんは絶対に僕を殺すだろう

昔からこの人は僕が許しを請う度にその都度それを無視して更に苛烈な暴力を振るってきた

だから僕は絶対に殺される

どんなに死にたくなくても、どんなに額を地面にこすりつけて懇願してもあの人は必ず僕をいたぶってから殺す筈だ

ヤバイ

このままじゃ僕は殺される

抵抗しないと死ぬ

しかし、足が傷つけている今の状態じゃどうにも――

――ひゅっつ

その時、微かに風の音が聞こえた

意識が少しそっちに向いた瞬間

母さんが再び僕の傷口を抉った

再び絶叫を上げそうになる激しい痛みが襲う

足を庇いながら転げ込み痛みに喘いでいる際に先程の風切り音の正体に気付く

崖だ

崖の岩肌を風が滑って大気を切る音で音が鳴っているのだ

藤谷の体の一部を投じた崖が僕の背後に在るのは解った

母さんから逃げているうちにいつの間にかそこに辿り着いていたら
しい

あのまま木の根っこ足を取られていなければ、冷静さを失い、錯乱
していた僕はそのまま谷底にダイブしていただろう

母さんに刺されて頭に少しばかり冷静さを取り戻したのは、僕にと
って不幸中の幸いなのかもしれない

頭の中に電流が走り何かが閃く

少し距離を置いた母さんが走ってくる

僕の中で次第に時間の認識される間隔が短くなっていく

一秒が一時間にそして一時間が一日に引き延ばれていった

母さんの動きがスローどころか、止まってさえ見える

動きだけではない、胴体視力を異常に強化されたかの様にあらんかぎりの形相で作られた中で一際引きつけられる濁りを宿した双眼が僕への怒りと憎しみで充血し、そのくせ妙に狂気に血走った母さんの眼球を睨みつける

母さんが走ってくる

銀色の鈍い輝きを宿した切っ先が僕に迫る

母さんが近づいてくる

僕は痛みに痺れる足の筋肉を叱咤し無理やり立たせる

母さんが迫ってくる

僕は負傷した脚を軸にして体全体に力を入れる

その時は、既に

僕と母さんの距離は一メートルにまで縮んでいた

一メートル

実際はその距離以上よりも何万メートルもそれこそ何千キロ以上に母子の心の距離は離れている

昔、僕は必死にその隙間を埋めようと必死に振る舞ってきた
それでも母さんは僕じゃなくみんなに好かれる哲也にしか関心を持たなかった

そして僕もつい五年前までは母さんに認めてもらおうと努力してきた
しかしそれも哲也を殺したことにより決定的な断絶が出来てしまい、
親子は一生分かり合えない溝を抱え母さんは僕を殺そうとした

だから僕はたった今、決意した

今現在まで僕と言う存在を自分の中で認識しなかった母さんを

絶対的な殺意を抱いて僕の存在を完全に抹殺しようとする母さんを

“ 殺す ”

母さんは生まれながらにして僕の存在を認めなかった

彼女以外に理解でき無い歪な価値観から家の中にて哲也以外の存在である僕を認めようとしなかった

ぎこちない親子ゴツコはここで終わりだ

僕は自分を殺そうとするただの狂った女を殺す

そう考えれば簡単だった

そして、行動を実行に移す

刺突を地面に倒れ込むようにして回避し、刃物を持った殺人者は勢いそのままに仰向けになった僕の身体につまずいた

無論、未だに殺人者の身体には前に進もうとする運動エネルギーが残留している

勿論、これだけでは母さんを排除するのには足りない

だから、僕は、母さんの体を両手で、

奈落へと突き落とした

地獄から伸びてきた腕に引つ張られるように殺人者は下へと落ちていった

僕が自分の見ている感覚がスローモーションで確認出来たのは次のあの瞬間までだった

それは母さん。いや、殺人者は束の間空中に滞空しながらも首だけを僕へと回転させ

にやり、と

醜い笑いの形へと顔を歪めたのが見えた

そして虚空に滞空する殺人者の体から前進を続けようとする運動エネルギーがゼロになる

その後、殺人者の体を捕まえたのは当然、重力の法則に基づいた落下エネルギーだ

そして母さんは墜ちていった

深い闇にひきずられるように

底など見えぬ、奈落へと

崖に突っ立っている僕に狂った笑顔を向けながら

下の闇に吸い込まれていった

数瞬後、骨と肉が硬い岩盤にぶち当たり、生肉が固い岩盤に叩き付けられるような鈍く湿った音が足元の下方より聞こえた

その後、山城と哲也の死体も処分した僕はすぐに車でアパート目指して夜明け前の山道を走っていた

夜明け前と言っても日の出ているの時間がどの季節よりも長い夏場のことだ

まだ空は暗く大気は涼しいが日はすぐに昇って周りは明るくなることだろう

帰った後どうするか揺れる車内の中で考える

僕はこれで四人も他人を殺してしまった計算になる

当然、四人もの人間が一気に行方不明者となれば警察は動き出すだろうし、下手なネタでは興味を示さないマスコミも当然の如く記者を派遣し、あちこちを調べて回るだろう

素直に自首して刑務所で規則正しい生活を送る気はさらさら無いので、もうすぐこの街から逃げる準備をしたほうが良いかもしれない

複数人も死体が発見されるとマスコミは急に騒ぎ出し、朝八時に主婦しか見ないワイドショーでスタイルだけが取り柄でアタマの足りない芸能人女優や支離滅裂でテレビ局が喜ぶ事しか言わない知恵者気取りの五月蠅い司会者が勝手に馬鹿い憶測を言い合って僕が起こした事件を仕事のネタにするのだろう

僕がいつも考えている事ではあるが

彼らは人の不幸を事件として扱うニュースを笑えもしない爆笑トークショーが何かに勘違いしているのだ

人の不幸に面と向かつては同情の意を示し、陰では嘲笑う現代の風潮を体現している番組では仕方無いことかも知れないが

殺人を犯した僕がこんなことを考えるのも皮肉だが、こういった連中にあだこうだと勝手な感想を言われ、ブラックジョークのネタにされた日には殺された藤谷も安眠出来ないだろうし、実際に手を下した犯人である僕から見ても腹が立つ事だろう

所詮、不幸な人の死やどころかの企業や有名人の不手際に対して

スキャンダルの裏にある本当に大切な事情すら押し量ろうとすらせずに公共の放送にて自分勝手かつ失礼な戯れ言を放つ連中が出演するような番組だ

人間は、他人一人無惨な最後を迎えてもその不幸が自分達に降りかかる迄は、痛みすら知ろうともしない

そうなのだ、

そんな連中が好む物など視聴する価値すらありはしない

僕は洋画番組しか見ないからあまり関係は無い話のかも知れなのだが

しかし、今日位は気まぐれで見ても良いと思った

ニュースで自分の所業がどのように報じられているのかも気になるし、一種の娯楽位にはなるだろう

藤谷のをバラした時と同じく自炊したチャーハンでも食べながらでだ

ニュース番組中においてバカなコメンテーター共が営利誘拐だとか、失踪した人達の無事を祈ってますとか本気でそう思ってもいけない癖に、当たり障りの無い戯れ言をほざいてたら思いつきり大笑いしてやろうと思う、

僕がどんなに大声を出しても文句を言ってくる奴など居ない

藤谷はもう死んだのだから

ああ、本当に愉快的事だ

腐った連中の為に奉仕する腐った社会に万歳

かさり

車の外で妙に気になる音がした

何故か車のタイヤが雑草を踏んだのだろうつとは片付けられない
妙に記憶に残る音だった

そして、それは無視できない現象へと変わっていった

かさり

かさりかさり

かさかさかさかさかさ

カサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサ

僕はそれだけでこの不可解な現象を察知してしまい
背骨が一瞬にして凍り付いたかの様な錯覚に陥った

見るな

絶対に見てはいけない

聴覚を遮断しろ

ここ数日でやたらと敏感になっている直感が警鐘を鳴らし始める

アレは化け物

アレは呪い

アレはおぞましいモノ

つい先刻まで高ぶっていた感情が鳴りを潜め、車外に存在するはずの“何か”に恐怖した

どすん！

鈍い音を立てて車全体が揺れたかと思っただけなら車のボンネットに“何か”が落下してきた

その“何か”は僕の直感を裏付けようにして一メートル程のある巨体を使ってフロントガラスに体当たりをしてきた

“何か”は体当たりで微かに罅の入ったガラス越しに人間とほぼ同じ大きさの赤い八つの眼球で僕を睨み付け、異様に長くそれぞれ一本一本が人の腕と同じ太さの足を四対、僕に対して威嚇するかのよ

僕の近くであの巨大な蜘蛛が蠢く忌まわしい音が響く

姿を見せない襲撃者は気持ち悪い音を立てるだけで僕の前に姿を見せようとしなかった

僕は覚悟を決めてポケットから果物ナイフを取り出し逆手に構えるこの際、足の痛みは無視した

——面白い。僕を喰うつもりならやって来い、逆に滅多刺しにしてやる

先程とは違う激く凶暴な高揚感に身を委ね、襲撃者の再来に備える

がさっ

一際大きな音が上から聞こえたかと思つた次の瞬間

朱い蜘蛛が僕の頭上から降ってきた

落下した大蜘蛛は僕の背中にのしかかり、鋭い牙を突き立てた

「うっ……………うおおおおおおおおッ！」

背中を襲つ痛みを無視して僕はくもを背中に両手を回し

けむくじゃらの大蜘蛛の巨体を掴みつつ、投げの勢いで後ろにのけぞつた背筋の力も込めて勢いよく前方へ放り投げた

巨大蜘蛛は直ぐにひっくり返った状態から体勢を戻したが、体全体はよろめき一メートル半を超える四対の巨脚を弱々しく蠢かして辛うじて直立させている

恐らく僕に投げられ、地面に激突した衝撃で体の動きが鈍ったのだろう

「ク、クククツ。この化け物があぁッ！」

脳から分泌されるアドレナリンと化け物を出し抜いた事によってもたらされた興奮の酔った僕は手の中の果物ナイフを得意気にクルクルと回す

この時僕は、自分のことを洋画で化け物退治をする主人公の様だと錯覚するような陶醉感覚に陥った

——動かないうちに化け物にとどめを刺してやる

そうだ

こいつを片付けて、この街を出た後は、今まで僕を陥れてきた連中に復讐しに行こう

藤谷の様に、山城の様に、哲也の様に、母さんの様に、殺してしまえばいい

小学生の頃に友達面を装って僕を嵌めた連中に、ランドセルを溝に

放り投げた連中に

中学生の頃に僕を無視した連中に

高校生の頃に僕に無関心だった連中に

バイトで僕を虐めた雌豚二人に、それに対し非干渉を貫いた店長に

どいつもこいつも皆殺しにしてやろう

僕の人生に負債を負わせた連中全てに復讐してやる

これも僕なりの新たな目的だ

警察がどうだ

マスコミがどうだ

刑務所がどうだ

そんなものはどうでもいい

僕は僕なりの目的を果たす

これらはそれらを邪魔する只のファクターに過ぎない

この化け物も同じだ

その一歩としてこいつは殺す

この化け物蜘蛛を排除してから僕の人生は初めて意味を得るのだ

僕を腐らせた連中を消すことで

決意を固めた僕はゆっくり化け物に歩み寄った

赤い大蜘蛛は八つの紅眼を僕に向け、威嚇するように光らせるだけで未だに体勢が整えきれない様子に見えた

僕はナイフを両手に持ち換え頭上にて大上段に構える

——これで終わりだ。化け物！

そして蜘蛛の頭蓋に刃を振り下ろそうとした瞬間

——え？

全身がいきなり硬直して動けなくなり、そのまま大地から天を仰ぐようにして倒れ伏した

何か起こっているのか全く理解出来なかった

化け物の奇襲によって牙が背中に刺さった時に麻痺毒が体内に入っただろうか？

ただ、右腕の痒みが日焼けし過ぎて肉が焼けてしまったかのような爛れから発生する熱のみが脳内を駆け巡っていた

僅かに自由の効く首を動かし、大蜘蛛の姿を視界に捉える

眼前の赤い蜘蛛は僕を静かに紅眼で見つめるだけで一向に襲ってくる気配が見えない

直ぐに襲って来ないからと言って僕は自分を安心させる事は出来なかった

化け物はまるで何かを待っているかのように僕は思える

何故そう考えた

悪い予感がする

これにこの景色

これはまるでこの前の――

鈍くなった思考が答えを見つける前に嫌な感じビジョンが浮かんだ
そしてその予感はすぐに的中した

ちくり

何か針のようなものが僕の足の傷に触れた

辛うじて動く首をそこへと向ける

見えたのは小さな蜘蛛だった

僕はそれに見覚えがあった

その虫は数日前に玄関で噛み付いたあのイエグモに似ていた
ちくり

再び微痛

そこにもう一匹イエグモがいた

合計二匹

否、

殖えたのは一匹だけではない

すぐに足の傷口に群がるようにして何十匹のイエグモが茶色いボ―ルを形成する様に群がっていた

「!？」

声が出ない

耐え難いおぞましさと嫌悪感で悲鳴を発したいに声は出ない

チクチク、チクチクと傷口に小さな針が刺さるような感覚が脚全体に感じる

増え続けたイエグモは既に百匹を超え、 尚も森のあちこちからいきなり湧いて数を増やすイエグモに牙を突き立てられているにも関わらず痛みはない

逆にそれが恐ろしい

周りは悪夢で見たような赤茶色の海

僕の体に取り付く蜘蛛も次第に数を増やしていく

今や森中の緑色が赤茶色に染まり、その波は大海の如くうねり、波をたてていた

ただひとつ確かな事はどうあがいてもこの蜘蛛の呪いから逃れることなど出来ないという残酷な事実だけだった

——そして何十分か経過した

体は既に無数の蜘蛛に蹂躪された僕の肉体は死を受け入れようとしていた

何も見えない

眼球は蜘蛛に貪られ既に暗闇の世界しか見えなかったから

体は外気の冷たさを感じることが出来ない

皮膚は既に蜘蛛の毒により溶かされ、爛れ、赤黒く変色した醜い腐肉が骨に張り付いているだけなのだから

口は大気を吸い込む事が出来ない

喉には空気の代わりに無数の蜘蛛で満たされ、僕の体の肉を喰らっていたから

さつき以上に感覚が鈍く感じる

徐々に視界もぼやけていく

少しずつ体温が冷え切っていく

思考が微睡むように沈んでいく

恐ろしいと感じていた気持ちは徐々に溶けていき既に無くなっていた

ただようやく終わるのかといった冷めた感慨だけが僕の胸の中にあ
った

終わる

一体なにが終わるのだろうか？

なにも無い空っぽの僕には何もない

ただ一つ自分の物だったはずの人生も終わる

それも普通は信じられない死因によって

既に何千、何万ものイエグモに肉体を食されながらも痛みを感じないのは不幸中の幸いかもしれない

——もう疲れた

僕はそろそろ休んでもいいだろう

自分はもう助からない

僅かに残っていた感覚によれば体中に張り付いた蜘蛛は僕の目や鼓膜等々に侵入し肉を喰らっているらしい

例え今から病院に運ばれて治療を受けてもやがては蜘蛛の神経毒で僕は死を迎えるだろう

眼球を喰らい尽くした蜘蛛が僕の脳髄にまで侵入し、牙を立て毒を注入し始めた

もうすぐ思考するのも限界らしい

最後に何を考えたのかは直ぐに忘れた

ただひとつだけの思考

『なんで僕は何時も不幸な目に逢うのか？』

最後の思考を終えた後

僕の肉体は死を迎え、意識は永遠に闇へと沈んだ

そして夜明け前のまだ暗い森の中には一人の人間の骨ばかりが遺っ

た死体に群がり、更に貪欲にそれをしゃぶり尽くす何万匹という数のイエグモとその“食事”を見守る一匹の赤い大蜘蛛だけの姿だけが残された

蜘蛛の復讐《完》

最終話（後書き）

この『蜘蛛の復讐』は私が初めて完結させた作品です
まあ思い付きで考えた作品ですのでここまで続くとは思いません
でした

次は近未来社会にて活躍する暗殺者が主人公の物語を書きたい
と思います

え、『デッドライン』、『非人道』はどうするか？

すみません。予定は今の所考えてません

『デッドライン』は文章が酷すぎるから黒歴史になっております。
まあ最終話までの予定はノートに記して有るので気が向いたら足
らない設定をプラスして執筆するかもしれませんが、他にビデオ鑑賞
や漫画執筆等やりたい事があるので（オイ

漫画の方は絵が上手くなって機会が訪れましたら載せたいと思いま
す。爛やジンのイラストは載っているんですがね（といっても中学
生レベルですが）

『非人道』の方はPCがワープロ買って執筆速度が上がればばち
ばち書きたいですね。

こちらは大まかなシナリオはノートに有るので多分書けるんじゃない
とは思いますがビデオ鑑賞やイラストで（ry

まあ無いでしょうが要望とか有りましたら書くかも知れません

蜘蛛の復讐書いて思ったんですが、やっぱり話を自分で考えて実際に形にするのは結構達成感があります。

スパロボJの四週目で隠し主人公機のラフトクランズ使えるようになるよりも嬉しいですよ^^

是非ともこのあとがきを読んだケータイ小説読者の方も試してみてくださいはどうですか？

色々な事が見えてきますので娯楽だけじゃなく人生の勉強にもなります

すいません。長くなった上に色々脱線してしまいました(汗

汚い文章でグダグダと申し訳ない、、

それではこれで失礼致します

僕の新小説でお会いになられましたら感想等お願いします。あ、批評でも構いませんよ^^

それでは『蜘蛛の復讐』を最後まで読んで下さって有難うございました(ぺこり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7854e/>

蜘蛛の復讐

2010年10月15日21時23分発行